慰安の福音

22
84

特61
474

小序

北度新人社特に雜誌『慰問號』を發刊し戰地從軍の士養痾呻吟の人及遺族者に對して慰藉を與へんとするの擧あるに臨み我青年會同盟軍人慰勞部に於ては曩日
聖上皇后兩陛下より賜はりたる金員の中を以て其原稿を贖ふ事とし携帶の便を計りて別に小冊子に改め慰安の福音と命名し在滿戰士の間に配り併せて世の有志の間に頒たんと欲して此書を發行する事となれり

明治三十八年八月

日本基督青年會同盟

明治 3 8 24 内交

慰安之福音

口繪聖母の畫像及其解題……一
何た以て慰問す可き乎……五
予が宗教的來世觀……二十三
遠征の軍人諸士に告ぐ……四十六
安心立命の二法門……五十三
小說村の名物……七十
小說まごころ……九十七
小女の手紙……百二十四
胡蝶のゆめ……百三十一
四人の姉妹……百三十五
戰死者の永生……百三十九
出征軍人諸氏に呈す……百四十七

聖母の畫像

（口繪解題）

久しからぬ以前に物故せし英國の名畫工ワッツ、嘗て人の世界に於て最も傑出せる繪畫は何ぞやと問ひしに答へて曰く、『余の見る所を以てすれば、ドレスデン美術館に保存せらるゝラファエルの聖母畫像こそ、世界に於て最美なるものにあらずとも、最美なるもの〳〵一つなりと言はんとす。其は至高の智的性質と藝術的天才とを併有す、即ち其は聖母の人格と聯想せらるゝ最美最高の思想を巧に表現すればなり』と。人の知る如く、サンテ、ラファエルは世界の生みし最大畫工の一人にして、三十七歳にして夭折せしも、名畫の數々を世に傳へた

り。この聖母の肖像は西暦千五百十五年、彼が三十歳の時維馬に於ける作と稱せらる。彼の短き生命を考ふれば、思想技術共に圓熟せる晩年の所作と目さいるべからず、其下書と稱す可きもの丶傳ばらざるに徴すれば、恐らくは一氣呵成、即ち完全なる思想の生める完全の作物たらんか。

本號の口繪は出來得る限り印刷の鮮明を欲せるが故に、この名畫の全部を出さず、上部三分の一を示すに止る。原畫はたとしへなき配色の妙を極むる由なれども、吾人はたゞ之を想像に委せざる可からず。端嚴妙相の聖母と聖兒とは、見れば見るほどなつかしく、仰げば仰ぐほど高くぞ思はる。原畫には翠帳左右に開いて、天の啓示をほのめかし、聖母聖兒を抱き地球を足臺となして攝理の恩愛と統御の權威とを表はす左には敬虔の礬れ高かゝりし法王シキスタス、右には貞節の權化とあがめらるゝ聖バルバラ女とが跪拜して世の渦仰禮拜の意を示し、無數の天軍はかすかに其等の周圍に翔翔す。この名畫を仰いで悲哀の心は慰められ、疑惑の思は安ずるに至りしといふ美談あげて數ふるに勝へず。今や日露の干戈結びて未だ解けず、人と人と相殺すの悲劇は未だ終らず、玆に妻あり。人誰か一度は靈あり、泣いて休せざる孤兒あり、父あり、は死して瞑せざる屍あり、泣いて休せざる孤兒あり、父あり、しかも暗雲收まりて天日照々、戰の巷にも、病の室にも、愛の神は臨み給ふ。泣ける人、悲める人請ふ、この慈愛の聖像を仰げ。戰の後は戰以前にまさる平和は來るべし。犧牲に對する報酬は與へらるべし。聖母の御手に抱かるゝ聖兒の如何

に美しきことよ。しかも彼は十字架上に死せざる可からざりき。あゝ人誰か犧牲なからんや。神の子は犧牲の生涯を以て犧牲の教訓を垂れたり。今日國難に際して自ら犧牲となり、或は愛する夫と兒とを犧牲とせる人々よ、願くは深く大能の攝理を思へ、吾人が慰問號の巻頭にこの聖畵像を以てしたる抑も故あるなり。

もとこの畵像はラファエルがピアヒンザの聖シスト修道院附屬の會堂のために畵きしものにして、爾來該寺院に保存せられしが、千七百五十四年、六千磅の高價にてサクソニーの選擧侯オーガスタス第三世に購求せられ、今はドレスデン美術館の寶物たり。

（愛天生）

慰安之福音

（新人慰問號拔萃）

何を以て慰問す可き乎

吾人は豫て帝國の發展に思を凝らすものなれば、日軍の勝敗安危に就ては、我帝國の何人にも劣らぬ憂慮と心遣と祈願とを以て海陸の戰報を待ち、其勝報に接する毎に、未だ嘗て帝國の發展と其靈能の發揮とを諷はざるはなかりき。然りと雖も此戰勝が如何なる代價を以て贖はれつゝあるかを思ひ見れ

ば、轉た悲痛に堪へざるものあり。固より上は皇室より下は五千万の同胞兄弟に至るまで、一人として此戰爭の高價に貢獻せざるものはなけれども其最も慘憺たる場裡に死生を賭する軍人と、其最も親愛なる遺族とは、此際最も多大の代價を拂ひつゝあるものにして、吾人は帝國の萬歳を唱ふると同時に、未だ嘗て軍人と其遺族との勞苦と疾痛とに思ひ當らずんばあらず。奉天の大勝と日本海の全勝とは、實に千古未聞の勝利にして、日本民族はいふも更なり、我に同情淺からぬアングロサキソン民族の如きは、驚歎極つて狂喜の狀態に入れりといふも、過言にはあらじ。況んや其衝に當る軍人と遺族との歡喜と面目とに至つては、富貴を以て贖ひ得べきものにあらざるは、吾人の羨望して止まざる所あり。然れども彼等の苦痛と辛勞と災害とは、吾人靜に之を默想すれば、悚然として戰慄せざらんとするも得ず。其身幸にして無難なる人々は、其辛苦を忘るゝ時あらんも、若し夫れ負傷したる者と、戰死したる者の遺族との如きは、平和克復の時來ると雖も、尙戰場に居ると同斷、幾多の疾痛慘憺たる人生の苦戰を嘗めざるべからざるなり。吾人が今に至つて慰問號を發せんとするの意、蓋し自から明なるべし。吾人は慰問するに當て、何の金品をも有せざるは、甚だ遺憾とする所なれども、宗教的

一片の同情に至つては、或は金品を以て表す可らざる者あらん。吾人の教友は天幕傳道に由て、其赤誠を表示しつゝあり。其功蹟の大なる、已に天聽にも達して、厚く其事業をよみせらるゝに至れり。吾人の文筆固より拙劣にして、同情の十が一をも開陳する能はずと雖も、亦以て全く慰問の意志を通ずべからずとせず。是れ吾人が本號を獻げて以て、慰問の主旨を貫徹せんと欲する所以なり。

誰れか戰爭を目して、弱肉強食の修羅場と云ふ。之れ斷じて正しき見解とはいふべからず。戰爭の裡面には幾多の事情が纏綿し居る中にも、崇高なる他愛の道念が大なる動機とし

て、伏在するを認めずんばあるべからず。我大君が上は皇祖の威靈に對して、畏敬愛慕の赤誠に感泣させ給ひ、下は臣民の休戚禍福、國家の興廢存亡に胸襟を惱ませ給ふもの、之を言明するも畏れ多し、我々五千萬の同胞兄弟も、此時局に際しては、誰れあつて自分一身の利害をのみ顧慮する邊なく、平日は私利私欲を貪つて、黨派の軋轢に狂奔妄動するものも、全く之を忘却して、國家の安危に全力を傾注するが如き、戰爭の時にあらざれば、之を見るべからず。平時は一厘一毛を貪る守錢奴が、國債の募集に應じ、赤十字社、恤兵部、其他あらゆる公共事業に、其秘藏の金錢を投ずるが如き、人

性良能の發揮といはずして何ぞ。況んや父母は其最愛の男子を、一人といはず、二人といはず、三人までも、戰場に派遣して愚痴を鳴さゝる如き、女子は自から寡婦となり、其子女は孤兒となるを知りつゝも、其良人を戰場に送つて毫も不運をかこつことなきが如き、又子たるもの其力なき老父母を遺し、夫たるもの其可憐の妻子を顧みず、奮然として起ち、猛然として進むが如き、其心事の崇高雄大なる、義理にあらず、他愛にあらずんば、焉ぞ能く此の如くならんや。其雄々しき動機中には、名譽心もあるべく、虚榮心もあるべく、不負魂もあるべく、功利心も手傳ふべし、しかも永久に持續する所

の、眞個の元氣は、大義の爲に戰ひ、國家安危の爲に戰ひ、人道の爲に戰ひ、東洋平和の爲に戰ひ、平等自由の爲に戰ひ、帝國面目の爲に戰ひ、公義正道の爲に戰ひ、博愛仁慈の爲に戰ふといふ、道念の源泉より溢れ來らずんばあらず。日軍の陸に海に天地を壓するばかり、英氣を逞うするは、天地正大の氣にあらずんば、焉んぞ能く此の如くなるを得んや。我軍の士氣旺盛にして、怒濤を叱咤し、氷雪を蹂躙し、炎天を冷笑し、烈風暴雨を罵倒するが如き、自然以上の靈能に由來せずんば解すべからず。

此の如き正氣の宿れる人格には、靈性本來の慰藉あり。吾人

の慰問を要すべきものにあらず。若し之れを要すとせんか、其要求する所のものは同一正氣の同情のそれにあらずして何ぞ。金錢物品を以てするの不可なけれども、高義の同情を以てするは、軍人諸君に取つて寧ろ衷心の滿足に非るか。吾人が此小やかなる慰問號を發刊するは、軍人及其遺族の犧牲的高義の精神に、聊か胸中の同情を寄進せんが爲のみ。抑犧牲的高義の大精神は萬物生々の氣なり。草木の生々として繁殖するも、もと生母が幾多の生子を産し、自己の生命を他に分與しつゝ、自分は其犧牲となつて死するに始まり、一草一木の亭々として繁茂するも、結局幾多の果實を結ばん目

的を以て其犧牲とならんが爲なり。禽獸の生々繁殖する、亦同一の犧牲法によるものなり。殊に母鳥が其雛鳥を保育せんと欲して、奮闘勇戰し、しばゝ〳〵其犧牲となるが如き、母獸が其幼兒を愛撫して、全く自己を忘るゝが如き、最も見易き事實なり。人類に至つては獨り其子女の爲に犧牲となるのみならず、其父母の爲に犧牲となる、獨り其子女父母の爲に犧牲となるのみならず、其隣人朋友の爲にも犧牲となるを得、又其隣人朋友の爲のみならず、其所屬君國の爲に犧牲たるを得。一家は其犧牲たる父母なくんば立つべからず、君國は其犧牲たる忠臣義士なくんば立つべからず。若し夫れ君主と臣

民と協心同力して祖國の爲に犧牲たるを甘せんか、國家の興隆期して見るべく、國家の威嚴誰れかまた之を侮蔑し得んや。櫻花はなやかに匂ふ旭日の天、日本帝國が獨り千秋に嶺々たるをうるもの、蓋し國父あり、國母あり、又國子あつて、犧牲的大精神の洋々たるに歸せずんばあらず。犧牲の大精神は國家存立の神なり、最も崇高なる國家發展の神なり。吾人は戰爭に於て此精神の發揮を見る、而して最も著しく軍人活殺の間に之を見るを得。之を自覺する者には天來の慰藉あり。吾人は活殺の巷を往來せざるものなれば、寧ろ軍人より天來の慰藉を聞くべきものなるに、敢て我れより之を呈せんと欲

するは、豫て基督の十字架を以て人生無上の慰藉と認め、毫も疑ふ所あらざるを以てなり。犧牲的大精神は獨り國家の活神にあらずして、また世界人類の神なり。佛陀の慈悲、聖人の仁、是れ世界を救濟する犧牲の精神にあらずして何ぞ。吾人は此大精神を最も明確に十字架上の基督に於て看取することを得たり。吾人が基督を神子として尊崇するは、取りも直さず、彼れの人格に於て宇宙の衷情本體を仰ぎ見ることを得るが故なり。一面より見れば、彼れの如きは本來死すべきものにあらず、分けても十字架上の死の如き、悲痛慘憺たる汚辱の死は、彼れの如き義人には

萬々ある間敷ことなり。然るを之れあるは深き仔細の存するものあればなり。深き仔細とは別義にあらず、人類は犧牲の精神に由つて救濟せられ、進化發展すべきものにしかも義人の血に至つては、最も必要なるものなれば、人類の神は彼れが人類救濟の爲に犧牲となりしを是認し給へり。人の世に存する本來の目的は、自愛の爲にあらず、他愛の爲なり。基督の死は即ち此人生眞義の極致を證明したるものにして、又神彼れ自身の衷情を表彰するものなり。故に犧牲の精神ほど神聖なるものはあらず。犧牲の精神は是れ即ち神なりといふとも、敢て神の尊嚴と神聖とを汚すものとは思はれず。聖書にいはずや、神は即ち愛なりと。犧牲は愛の生活其ものにあらずや。吾人之を萬有の生々に徴し、之を家庭の存立に徴し、之を國家の興隆に質し、之を佛陀聖人の衷情に照らし、之を基督十字架上の犧牲に鑑みるときは、宇宙の神其れ自身が此犧牲の大靈たるを識認せざるを得ず。吾人はこゝに此大眞理を呈して、我敬愛する軍人と其遺族との慰藉に供せんと欲す。

優勝劣敗、弱肉強食の如きは、確に宇宙の一面に相違なしと雖も、吾人を以て之を見れば、そは皮相の觀に外ならず、若し夫れ古今を照破して萬物生々の眞相を觀すれば、天地萬有生々の精神は犧牲に存するや疑ふべからず。然らば則ち犧牲

の頭上に神明の住し給ふや亦疑ふべからず、是れ蓋し天佑の我軍を離れざる所以なり。犧牲の精神は宇宙萬有の依て生き、依て動き、依て存し、又依て旺盛を極むるもの、永遠より永遠に且つて、不變不易なるもの、不生不滅なるもの、犧牲の精神は、吾人をして天父と絶叫せしめ、天母と號泣せしむる所なり。軍人犧牲の精神や、若し夫れ基督神子の靈に啓導せられんか、眞に神父を呼び出す神子の靈たるを得ん。此の如き犧牲の精神には天父より來り臨む無限の慰藉あり。詩聖は左の如く謠へり。

我れ臥していね、又目さめたり、神我を支へ給へばなり。

我をかこみて立ち構へたる千萬の人をも我はおそれじ。

此の如き心靈の慰籍は金品を以て購ひ得べきものにあらず、神と同情の人にして始めて之を完うするを得。此慰籍は決して一時的のものにあらざるなり。犧牲の精神は本來無窮なるものなれば、固より肉體と偕に消滅すべきにあらず、此精神は危難に處し忽ち人をして左の如く祈らしむ、曰く

神よ、神は永遠より永遠まで活き給ふ、我れ何ぞ消滅し去らんや。神の活き給ふ如く、我も亦長へに生きながらへん。」

外形の人は草花と偕に散り失すべし、靈性の人に至つては、永存して不滅なるものなり。外形の人は朝に紅顔、夕に白骨

たるべし、靈性の人に至つては、無常の境域を超越して、常住の聖域に逍遙するものなり。基督十字架上に慘憺たる死を遂ぐ、しかも彼をして三日の後必ず復活すべきを自覺せしむ、蓋し犧牲の靈性が彼れの人格を構成したるを以てなり。我敬愛する名譽の戰死者は、吾人之を慰問せんと欲するも、及ぶべからず、唯恩愛温なる無窮の哀情、犧牲の慈悲に愛撫せられ、既に上天の慰籍に入りたらんを望み、俯して地上の遺族を想うて、亦彼等の爲に吾人の祈禱を要せざるを信じて疑はず。

軍人戰場の生活は、人生の二面を最も激甚に、最も著明に、對照するものなり。其無常慘憺たる方面は、鮮血淋漓たる修羅場の光景なり。其永遠無窮なる常住悦樂の方面は、其犧牲的生活の狀態なり。戰場に立つもの、負傷するもの、疾病あるもの、遺族を想ふもの、死に頻するもの、敵手に擒にせらるゝもの、若し夫れ人生無常暗憺の方面をのみ觀せんか、軍人ほど世にあはれ墓なきはあらざるべし。然れども足を犧牲の見地に立て、眼を常住無邊の神境に注がんか、軍人の生活ほど雄々しく、勇しく、神々しきはあらざるべし。宜なるかな、詩人をして人生は戰爭なりと謠はしめたる、哲人をして生活は爭鬪なりと論ぜしめたる、又神子基督をして、我が來

るは、地上に泰平を出さんが爲と思ふ勿れ、泰平にあらず、干戈を出さんが爲なりと、絶叫せしめたる、畢竟するに、猛奮勇闘の犧牲的生活が、如何に人類の進化發展を指導する高明正大なる雄々しきものなるかを、謳ふたるものなり。此犧牲的精神こそは、實に人をも活かし、我をも活かす救世主の生活なれ。吾人は軍人と其遺族とが、此救世主の大精神により、天來の慰籍に充ち溢れん外、假令全國民が擧げて慰籍を呈せんと欲するとも、終に彼等を滿足せしむべからざるを知るが故に、縞に敬愛なる軍人と其親愛なる遺族との爲に上天に祈願し、茲に天來の慰籍を求むる誠意を表せんと欲す。

予が宗教的來世觀

海老名彈正

私には二種の來世觀があります。一は哲學的來世觀といふべく、一は宗教的來世觀といふべく、前者は哲學の本山ともいふ

べきギリシヤ人の中に研究せられ、後者は基督教の本旨といふべきユダヤ人の中に發揮せられました。私は假に人生の最後を想像して見れば、端なく二種の觀想が起つてきます。一は、我れ今久しく研究しても能く分らなかつた死を實驗することゝなつた、未だ嘗て夢にも見ることの出來なかつた人生の最大問題を實驗的に解すべき時機に遭遇した、時としては有らん限りの興味を以て研究してもよく分り兼ねた大問題に接觸するに至つた、死とは如何なる關門であるだろうか、來世とは如何なる狀態な者だろうかと、最早數十分のうちに、數分のうちに判明するであろうと、一小哲學者の興味と態度とを以て死期に近寄るのであります。」一は、私をして實に左の如く祈らしめます、「今日まで間斷なく我を愛撫し給ふた恩愛の父よ、今父の召を蒙つて人生の戰場を辭します、願くは更に高大なる光明界の生活に受け入れ給へと。學究的來世觀は餘り有益とも思ひませぬ、私には閑問題でおつて、全力を盡して之を研究する暇はない。從つて皆樣に說敎する程のインスピレーションも發してきませぬ。けれども宗敎的來世觀に至つては私の血液と生命とでありますから、之れなくしては一日も生活して居ることは出來ませぬ。故に皆樣に說敎致しますと、否說敎せずには居られないのです。

私は信仰の始に當つて神と君臣の約束を致しました。神が私の君主であることが、電光石火の如くして私の中心に徹底致ました、其時私は飜然として悔悟し、神の臣僕となりましたが、此君臣の關係は私の良心に照らし、私の理性に質して、決定せられたので、實に切つても切られぬ倫理的關係であります。此倫理的君臣の關係は、其深いこと限りなく、私の人格其ものゝ根抵となつて居ります。神がもと〳〵私を召して其臣となし給ふたので、其意志を變じ給ふ筈はない、私も自分の良心と理性とに照して斷定したのでありますから、神を棄つることは出來ませぬ。若し千萬が一神を棄ることもあらば、其時こそは私が人格の墮落であつて、私の道義的存在が忽ち消滅する時であります。神を棄てたる私には、固より神を愛する愛心も起る筈はないのであります。神の聖なる榮光に對しては、或は盲人が光風霽月に接するが如く、又は眼病の人が日光を恐れ厭ふが如く、否日光は却て病眼の明を奪ひ去るが如く、其道義的生命を失ふことは疑ありませぬ。故に私の生命は、少くとも道義的生命は神を敬愛することに由て、保たれて居ります。實に神は永遠限りなき靈であつて、私は此神靈と切斷すべからざる命脈を結び連ねて居りますから、神が永遠に私を臣として顧み給ふことゝ、すこしも疑はれませぬ。私は

いま小々理屈に走りましたが、直言すれば、神は萬々私を棄て給ふ筈はない、私も神を棄つることは出來ぬ、神は永遠限りない靈と信じ込んだ私は、此君臣の關係を永遠まで繼續するということを疑ふことができない。神よ、アナタは永遠より永遠まで生き給ふ、私は決して死じと、私の確信は私をして祈らせます。

此確信は哲學者が教へて呉れたのでも、何でもありませぬ。神と私との君臣の交際が、愈々親密になるに從ひ、益々確實となつてくるのです。學問は此確信を科學的に説明するものとして、私は之を研究しますけれども、學問で説明せられなかつたと申て、此確信は聊も減ずるものではありませぬ。又此確信が假令學問で容易に説明せられなかつた所が、決して迷信ではありませぬ。何んとなれば此確信は吾々の道義的信念に其根底を深く〳〵築き立て〳〵居ります、築き立て〳〵居るといふよりは、寧ろ道義的本來の信念其ものと申てもよかろうと思ひます。

又神と私との關係は、君臣のそればかりでない、父子の關係であります。神に信賴することが深くなり、神の威嚴ばかりでなく、其恩愛の鴻大なるを認識するに至りまして、神は獨り敬すべきにあらずして、愛すべきものなることが分つて

きました。此深い父子の關係は人倫の中にもあるやうに、實に、父子有親であります。我は神の愛子、神は我の愛父、其關係の親密なるは、聖書にある如く、父我にあり、我れ父にあり、父と我とは一ツなりであります。此父子の生活ほど天地の間に樂しく、悦ばしく、神々しきものはありませぬ。此生活は毫も私心の混らない、愛ばかりの生活であります。さて受くるよりは與ふる方福なりと、基督は言ひ給ふたが、是れ即ち愛の生活で、神が其愛子に與へ給ふ最大の恩賜は何んでありましようか。聖書には神が世を愛しては其獨子を賜ふわけは、凡て彼を信ずる者に永生を與へんが爲なりとあれば、神の其愛子に與へ給ふ最大の恩賜は永生であります。永生の内容は人生のそれよりも、最も豐富であつて、又最も高尚なる生活であります。神の限なき愛が其愛子の衷心に充ち溢れ、又人の愛が神と其無限の天地に對して、無窮に仰ぎ注がるべき生活を永生と申します。神若し其愛子に對し、其愛を制限し給ふならば、永生の内容は到底盡されませぬ。人としては固より自我を忘れて神を愛するのでありますから、神の手にあつて消滅することは決して厭ふ所ではありませぬ。けれども神は果して其愛子の消滅を悦樂し給ふのであろうか。萬々然らず、神の愛子も其無上の愛父を見失ふとは、之れは

ど苦々しきことはありませぬ。父子有親の愛は偶然の存在を有して、消滅すべき低價のものではありませぬ。愛は宇宙の最大最高の活動であつて、しかして神と人との愛は、即ち愛の王であります。此愛の王が消滅するのであろうか。若し夫れ消滅することもあらば、神其れ自身も消滅し給ふのではなかろうか。神は元來永遠なるものなり、不生不滅なるものなり、なんで其愛が消滅するにことがありましよう。然らば則ち其愛の目的たる愛子が消滅すべからざるは、火を見るより明白であるとは、愛父の靈に充實する愛子の論斷であります。假令死といふものが一時此親愛の關係を破ることがあるとも、夫れは眞に暫時にして、間もなく之れが恢復せられんとほ、神子の確信であります。是れが取も直さず、三日の後復活すべしとの確信であります。

前段に申述べた宗教的實驗は私が來世觀の基礎であります が、是れは決して私一人の實驗ではありませぬ。舊約聖書中に見ます來世觀も、同種の實驗を基礎として立てられたものであります。舊約聖書の來世觀は甚だ曖昧であるとの批評がありますが、其曖昧な所が中々面白いのであります。之れは決して佛教や回教のそれのやうに、想像の地獄極樂ではありませぬ。ユダヤ人は人生の墓なきを厭ふて來世を慕ふたの

ではない、又現世を旅のそらとして來世にあこがれたのでもない、彼等は唯物的ならざる現世的思想に充ち溢れて居りました。彼等は現在の天地萬有を以て神の榮光のあらはれと歌ふて居ります。レバノン山の葡萄、橄欖山の橄欖、ゲヂサレの小麥、ガリラヤ湖の魚、眞に味ふべく嗜むべき神の恩賜として、之を享受して居ります。彼等には別に極樂もいらなければ、パラダイスも望ましくない。シナイの山、タボルの峯、カルメルの嶽、ユダヤの野、又ゲリジムの嶺、悉く皆神に見ゆることを得る聖地であります。彼等が神の靈氣を呼吸するは、猶山上の清風を呼吸するが如く、彼等が神の靈氣に浴するは、猶カルメルの百合花とレバノンの葡萄樹とが露と光とに浴するが如く雷霆忽ち驚けば、稜威ある神の聲なりと歌ひ、風雨忽ち荒ぶれば、神は雲を其衣となし、風を其車として降臨し給ふと歌ふ。彼等の天地は宗教に充實するそれ、天地其ものが、神の宮殿、民衆の拜殿、極樂其ものゝ、パラダイス其ものであつた。民族と神との關係を論ずれば、父子たり、君臣たり、夫婦たりであつた。此現世的、又倫理的宗教の實驗は、神聖にして犯すべからざるもの、死と雖も之ればかりは破滅すべからずとは、彼等が齎ち得たる確信であります。彼等の預言者は左の如くいひます。

エホバ、我神、我聖者よ、汝は永遠よりいますにあらずや、我等は死なじ。

彼等の詩人は實に左の如く謠ひます。

我れ常にエホバを我前におけり、エホバ我右にいませば、我れ動かざるべしとなかるべし。この故に我心は樂み、我榮ば喜ぶ。我身も亦平安にをらん。そは汝我魂を陰府にておき給はず、汝の聖者を墓の中に朽ちしめ給はざればなり。爾生命の道を我に示し給はん、汝の前には充ち足る喜びあり、爾の右にはもろ〳〵の快樂とこしへにあり。

彼等は現世にて實驗する恩惠が決して消滅に歸すべきものならざるを信じて疑ひませぬ。彼等が憧憬の目的は神其ものであります、神の榮光其ものであります。彼等は之を客觀的に仰ぎ見るばかりで滿足はしません、之を主觀的に自分のものとしないでは止まないのであります。彼等の詩人は謠ふて曰く、

あゝ神よ、鹿の溪水を慕ひあへぐが如く、我靈魂も爾を慕ひあへぐなり。

又曰く。

爾其訓諭を以て我を導き、後また我を受けて、榮光のうちに入れ給はん。汝の外に我れ誰をか天にもたん、地には爾

の外に我が慕ふものなし。

彼等は神に同化し、神の榮光に入つて始めて滿足を得るのであります。其歌に曰く、

我は義にありて聖顏を見、目さむるとき爾の容光をもて飽き足ることを得ん。

彼等は此の如き積極の宗教的實驗を積んで、現世以上の來世を感發したのであります。彼等が地獄極樂の想像に耽らないだけ丈其れ丈、其來世觀が健全であつて、高明正大なのであります。彼等の來世觀は想像ではありません、倫理的情念と意志とに由つて、看得せられた、向上的必然の觀想であります。

樹木が亭々として生長すれば、終には葉茂り、花開き、果結ぶに至るは、必然の結果であるやうに、道義の神を信じ、恩愛の父を愛して、間斷なく上達するときは、神に同化して其榮光に入らんとの希望に充ち、又其希望の決して我を欺かざるを確信するに至らんこと、宗教道德心の必然的傾向、否結論であること、斷じて疑はれませぬ。

基督の來世觀も同一の宗教的實驗によるものでありまして、彼は此父子有親の生命を以て無上の價値ありと見給ふた、曰く、

人もし全世界を得るとも其生命を失はゞ何の益あらんや。

又人何を以て其生命に易んや。

かくまでに生命の價値あるを自覺し給ふ者が、風前の燈と偖に消滅すべきにあらざることは、當然のことゝいはねばなりませぬ。此生命の內容はどれほどあるやら測り知られませぬ、之れは實に基督の人格を構成して居る所のものではありませぬか。天地開闢以來萬物の進化發展しつゝある最終の月桂冠は實に、此人格を生じたるに外ならぬ。獨り萬物ばかりではない、人類又は特種の民族が煩悶苦闘して產み出さんと欲したるは、實にキリストの人格であります。此罪惡なき完全の人格が朝露と偖に消滅するものでありましようか。キリストは斷じてしか思ひ給ふことは出來ない。彼れの此高潔なる意識は、彼をして神の獨子たるを自覺せしめた。神に信賴する宗教子を朝露と偖に滅ぼし給ふのであろうか。神は其獨心は斷じてしか考ふることは出來ない。神父と神子との親密なる交際は、獨り神子に取つて價値あるばかりでなく、又神父に取ても無限の價値があります。一小人の亡ぶることをすら欲し給はない恩愛の父が、其獨子の死を肯し給ふことがありましようか。斷じてありませぬ。さらば基督が永生を自覺して、毫末も疑ひ給はないのは、縱から見ても、橫から見ても、至極當然のことでありましよう。然らば亦此獨子の交際

にくはゝり、彼の靈に同化して、神と父子の關係に入りたるものが、彼と偕に永遠の生命を完うせんことを疑ひ給はないのは、必然のロヂックであります。基督以來、實に一千九百年の其間、基督を信じて、彼に同化したる幾萬幾億のクリスチヤンが、同一の確信を懷き、其地上生活の內容が永遠に發展せんことを希望して、毫も疑はざるに至つたことは、實に人類史上の一大事實であります。

前段の來世觀は決して學究の結果ではありませぬ。學究の結果ならば、論破せらるゝこともありましよう、又辯論を要することもありましようが、之れは學究でもなければ、想像でもない、實に倫理的宗教の實驗であります。之れが間違て居るならば、元來宗教といふが間違て居ります。宗教が間違て居るならば、元來人間其ものが間違て居ります。人間其ものが間違て居るならば、是もなく非もなく、眞もなく僞もなく、否、是非もなく眞僞もないといふことすら分りませぬ。否、是非も眞僞もないといふことすら分らないといふことがテンカラ分りませぬ。

父我れにあり、我れ父にあり、我と父とは一ツなりと自覺する基督は、薄信なる我々を慰籍して實に左の如くいひ給ふ、曰く、

遠征の軍人諸氏に告ぐ

島田三郎

開戰以來一年有半、陸海の連捷は、危を轉じて安と爲し、國威を揚げ國光を輝かし、一捷を博せんとする露人の僥倖心を絶ち、彼等をして米國の提議を容れざるを得ざらしむ、是れ偏へに我忠勇義烈なる軍人諸氏の賜なり、吾等は日本國民として、先づ國安を保ち國威を揚げたる諸氏の功勞を感謝せざる可からず。

然れども功は決して此に止まらざるなり、由來西人の東洋を視ること甚低し、彼等謂へらく、東洋の文明は過去の産物なり、其人種は既に老衰せり、支那印度は嘗て四邊に文化を光被したりと雖、今は燼餘の殘灰の如し、日本近時歐米の文明に倣ふと雖、畢竟狒猴の冠に過ぎず、地球は白人經營の領域にして、他の諸族は之に從ふべき宿命を有すと、彼等は東洋人に組織的能力乏きを謂ひて、其智力の發展を否認し、東洋人の勇氣は蠻風を帶びて危險なりと謂ひて、以て其德性の缺陷を非難せんとす、然るに日露の對戰は、大軍の操縱、巧妙の進退に於て、我國人の組織的能力を示し、戰鬪の勇武壯烈に於

爾曹心に憂ふること勿れ、神を信じ、我を信ずべし。我父の家には邸宅多し、然らずば我れ豫て爾曹に之を告ぐべきなり。

之を我宗教的實驗に照らし、之を舊約書詩聖の實驗に照らし、之を基督以來幾億人の實驗に質し見るに、基督が私共を欺き給はざること、恰も中天の日の如し。皆樣徒らに未來を觀想し、猥りに空想の議論に耽り給ふ勿れ、是れ決して來世を達觀する道ではありませぬ、寧ろ神を親愛して基督の人格を自己の人格に實現せしめ、眞個の自尊自重を自覺するに至らば、來世觀は自から明なるべし。生の內容を遺憾なく發展するときは、死は自から解せらるべし。

斯く宗教的生命の內容を實現するときは、皆樣は自己の健全なる來世觀を齎ち得給はんこと疑ひありませぬ。猥りに學究的に來世の有無を論議するやうのことは、極めて無知の所業であります。

遠征の軍人諸氏に告ぐ

島田三郎

開戰以來一年有半、陸海の連捷は、危を轉じて安と爲し、國威を揚げ國光を輝かし、一捷を博せんとする露人の僥倖心を絶ち、彼等をして米國の提議を容れざるを得ざらしむ、是れ偏へに我忠勇義烈なる軍人諸氏の賜なり、吾等は日本國民として、先づ國安を保ち國威を揚げたる諸氏の功勞を感謝せざる可からず。

然れども功は決して此に止まらざるなり、曩來西人の東洋を視ること甚低し、彼等謂へらく、東洋の文明は過去の産物なり、其人種は既に老衰せり、支那印度は嘗て四邊に文化を光被したりと雖、今は燼餘の殘灰の如し、日本近時歐米の文明に倣ふと雖、畢竟狒猴の冠に過ぎず、地球は白人經營の領域にして、他の諸族は之に從ふべき宿命を有すと、彼等は東洋人に組織的能力乏きを謂ひて、其智力の發展を否認し、東洋人の勇氣は蠻風を帶びて危險なりと謂ひて、以て其德性の缺陷を非難せんとす、然るに日露の對戰は、大軍の操縱、巧妙の進退に於て、我國人の組織的能力を示し、戰鬪の勇武壯烈に於

て、犧牲の精神を現はし、殺戮を事とせず、降虜を虐せず、傷病者を憫み、戰列以外の者を犯さゐる高尚の行爲を以て、徳性に素養あるを傍看者の公評に博し得たり、是れ唯多年、我國民が被れる誣罔を解きたるのみならず、又以て東洋民族に對する彼等の僻見を破るに足らん、蓋し自覺は進修の母なり、日本軍人の博し得たる聲譽は、日本國人の自覺を促がすべし、日本國人の自覺は、更に東洋民族に進修の端を發せん、吾等は此意義に於て、軍人諸氏の功勞を感謝せざる可からず。

露國が擅制の舊窩を保持して近代自由の思潮に抗すると多年、其地域北方に偏するの故を以て、嘗て西歐思想革新の活火に觸れず、獨逸に發したる宗教の改革、佛蘭西に起りたる政治の革命、共に露國を蕩かすに至らずして、依然たる舊社會を歐洲の一角に保てり、其團結せる勢力を以て、內に擅制を行ひ外に侵畧を逞くし、一時內外を制して、威力を誇示し、露人自ら其成功を矜るのみならず、世界に散在する擅制謳歌者は、露國を引例として、自由を排斥し、擅制を主張し、隱然露國を推して擅制の本據とせり、然るに日露の戰爭に於て、露國が其內部に包藏したる弊害を曝露し、財力給せず、兵氣振はず、大臣の暗殺、軍隊の反抗、職工の罷業、官僚の腐敗、一般の不平、外患の急に乘じて、國內に並び起り、殆ど拾收する能はざる一大混亂を生じたり、是等災禍の原因が、首として擅制の積習に在るとは、戰爭の際に、立憲自由の政治を要求する請願によりて明白となれり、蓋し日露の戰あらざれ

ば、擅制の弱點此の如く證明せらる可からず、露國大敗を取るに非ざれば、内政の改革緒に就く可からず、戰爭は早晩止むべきも、戰爭によりて點火せられたる改革の運動は、或る目的を達するに至らば、決して止まざるべし、此運動の結果、露國の政治に一新紀元を開くを得ば、多數の露人は、此に自由の空氣を呼吸して、多年の抑壓を脱るゝを得べし、夫の露國の成功を艷稱して、擅制政治と侵略主義とを皷吹する謬見は、業に既に破却せられたり、此一事も亦快と稱するに足れり、是れ今回の戰爭が廣く世界の進歩を助け、憐むべき露人に與へたる一大利益にして、間接の影響と雖も、亦我軍人健闘の餘惠と言はざる可からず。

嗚呼我軍人は君國の爲めに自己の生命を獻牲せり、敵軍を紛

亂して、帝國を富嶽の安きに置きたり、祖國の光輝を揚げて、人類の進歩を助けたり、其任務を盡すに當り、或は風濤を凌ぎ、濃霧を冒し、或は險阻を越ゆ大野を跋み、酷熱苦寒の下に立ち、霖雨深雪の中を往き、敵彈を冒し、白刃を踏み、血河屍山の慘況を現はせり、其死者傷者の爲めに悲痛すべきは言ふを待たず、目下征衣を着けて、陣營を戍る軍人諸氏の辛苦を想へば、吾等洵に同情にたへざるなり。

嗚呼軍人諸氏の精神欽すべし、語に曰く、人の爲めに生を獻ぐるは、愛之より大なるはなしと、諸氏は愛國の戰爭に努力し、東洋民族の利益、世界人類の進歩の爲めに其天職を盡したり、其犧牲實に多し、然れども諸氏自ら顧みて、世界の文明に寄與せる功果の、此の若く甚大なるに想到せば、少く慰

むる所あらん、媾和談判近く米國に於て開始せられんとす、
然れども露國の眞意未だ測る可からず、且談判は媾和の開幕
にして、媾和其者に非す、軍務は媾和と平行して、各自獨立
の職分を有せり、軍務の進行ありて、初めて談判に勢力ある
べし、媾和の聲は、如何ぞ軍務の實を緩くすることある可け
んや、國民は軍人の辛勞を想ふが故に、情に於て凱旋の一日
も速からんことを望むも、國家の大計に鑑みるときは義に於
て尚ほ在陣進軍を乞はざるを得ず、帝國の聲譽利益、人類の
進歩開運、皆懸りて軍人諸氏の肩上に在り、吾等は其任務の
重大なるを想ひて、其在營の勞苦を慰め、切に健康の保全を
祈る、諸氏が開戰の目的を大成し、錦衣の凱旋を、帝國の埔
頭に歡迎せんことは、吾等の志願なり、今より樂みて之を待

たん。

安心立命の二法門

綱島梁川

安心立命の三昧地に入るに、大凡そ二つの總門あり。一を「あきらめ門」といひ、二を「信賴門」といふ。尚ほ之れを細別すれば、幾多の表門（おもてもん）、裏門（うらもん）、拔門（ぬけもん）、勝手門（かってもん）などいふもあるべしと雖も、古來凡そ安心立命を得たらんほどのものにして、此の二大門の何れかを滿心の自覺もて熱心に叩かざりしは無かるべし。かくて前の一門より入りたるものは即ち「あきらめ門」の勇者、凡神敎的勇者也、後の一門より入りたるものは即ち「信賴門」の勇者、一神敎的勇者也。

この三種の勇者は皆等しく崇び敬ふべし、いづれをか貶さん。且つや人のこの二門の何れかに入らんとするに方たりて、其の趣向を決むるものは、個人の性情也、傾向也、好尚也、人格也、事情也、境遇也、機會也、されば今必ず一の門を捨てゝ、他の門より入れと強ふる譯にはゆかず、かゝる人生の一大事を決するに、口舌三昧を以てするも竟に益なかるべし。

たゞ予輩一己の實驗を云はゞ、眞の光輝ある安心立命は、「あきらめ門」の勇者の上にあらずして、「信賴門」の勇者の上にあり。予は曾て前の一門より入りて安心を求め、而して一たび之れを得たりと思へり、されど得たりと思へるは竟に幻しに過ぎざりき。そは竟に吾が眞要求を充たすには足らざりき。缺然たる空虛の感は、やがて復び吾れに還りたり。吾れは去つて第二門を叩き、更に第二の安心を得たり。而して其は眞實のものなりき。そは吾れを心の底の底より潤し、温め和げて、而かも向上の一路に皷舞作興息まざしむる眞個の靈の力なるとを感じたり。人生の眞諦こゝに日の如く耀きて、充足、平安、光榮、祝福の感、また加ふるものなからんとす。感謝は初が日ごとの糧となりぬ。

何が故に一門は吾が要求を容れて、他門は之れを容れざりし、吾が自覺の證する所、答ふる所は極めて簡明也。曰はく、一は消極的安心にして、他は積極的安心なればなりと。

「諦める」は消極的安心也。「信じ賴む」は積極的安心也。されど消極的といひ、積極的といへるのみにては、意義極め

て漠たるが故に、更にこの二語の意味を打開くに及びて、始めて安心二門の價値、優劣に對する批判は分明すべし。暫く下に說く所を聽け。

「あさらめ門」の勇者は以爲へらく、人生は空の空也、衆生及び世界は夢の如く光景の如し」。「我」の存在に執するも亦迷也。一切萬有を空と觀じ去り、一切諸緣を放下し去りて、涅槃寂靜、始めて期すべしと。彼等が安心の極意は、死也、虛無也、寂滅也。「大いなるかな死、君子息ひ、小人伏す」。彼等が安心は墓の「彼方」にあらずして、墓そのもの、中にあり。彼等は「生きんが爲めに死ぬる」にあらずして、「死なんが爲めに死ぬる」なり。彼等の願ふ所は死之生にあらずして、死之死也、往いて反らざる大死也。寂然として聲なき「絕對」

そのものを一個の墳墓として永劫の大眠に入る、これを彼等の安心立命とす。

更に「あさらめ門」の他の勇者は觀ずらく、因果の法則は一切萬有を貫きて易はらず、何物か何人か、この因果の大海の波間に浮び、漂ひ、流れざる。人とは何ぞ、我れとは何ぞ、唯だこの因果てふ無端の鏈鎖の一つの結び目にあらずや。因緣の所生に自性あるとなし、我あるとなし。一切は是れ前因と後果と偶々相依り相緣じて結び出だしたる幻しのみ。自力といひ、自由意志といふ、畢竟空語のみ。雨に法あり、風に律あり、人に定業あり、人間とは所詮、語り且つ考ふる一個の精妙の器械にあらずや。我が履むべき道は既に先天必至の約束として定まれり。好くも好かぬも、假

す所なき宿命は、爾を曳きずりて其の到る所に到らざれば已まざるべし。されば人よ、踠く勿れ、焦躁る勿れ、何事も因果とあきらめて、一切私意を騁するなく、妄情を動かすなく、寂然として天地の大法に服從せよ。我等の安心法即ち是れなりと。

因りて觀れば、所謂「あきらめ門」の勇者の安心法、亦知るべきのみ。一は生死流轉の因果の絆を斷ち去り、空じ了りて、寂滅爲樂の涅槃に眠れといひ、（印度哲學の一部、釋迦教の根本思想、乃至はショーペンハウエルの人生觀など之れに當る。）他は一切の出來事を因果宿命の必至の大法の然らしむる所と觀じ、何事もその自然の成り行きに打任せて復た心を動かすこと勿れといひ、（ストア思想の一面、列子、スピノーザの解脫觀等、この品彙に入るべし。）要するに、いづれも一種の消極的安心法なりといふべし。是

くの如き消極的安心法は、果たして吾人の心に窮極の滿足を與へ得べき乎。予輩は今この安心法に少くとも三個の不滿足あることを指摘すべし。第一、この安心法の最も重きを措くものは知識也、其の意にいふ、諦めるといひ、悟るといふ、皆知識もしくは知慧の沙汰なり。吾人をして一切の痴妄顚倒より脫離せしむるものは知見の光なり、知見是れ唯一眞實の物、他の意志感情の如きは吾人をして限りなき迷誤の巷に流轉せしむる無明に外ならずと。是くの如き知識偏重觀は、果たして能く吾人人心の要求を捉らへ得たりといふを得べき乎。知識は重んずべし。されど予輩の人生觀、安心觀中に立つ知識の位置は、竟に第二義に墮ちざるを得ず。知識は究竟、情意の奴婢也（この點今は詳論の遑なし）。第二、一切を夢幻と悟

りすてよといひ、何事も因果を諦めよといふ、さりながら天地人生を唯だ夢幻しとのみ悟りすてんには、餘りに深き意義あり、一切を因果の偶然とのみ諦め去らんには、餘りに深き涙あり。理性や知識の自悟自照をのみ偏重して、吾れ能く一切を悟りぬ、諦めぬといふものは、未だ眞に、悟りて悟りきれぬ諦めて諦めかぬる深き〳〵心の底の要求を自覺せざるものなり。かくて彼等の或者は、われは顏に思ひあがりて、一切を瞰おろす超人の威を示せど、彼等も亦人の子なり、時に自家心靈の要求に裏切りせられて、堪へがたき寂寞空虛の思ひに、我れ知らぬ涙の下ることありぬべし。天地人生は夢にあらず、幻しにあらず、單なる因果の鏈にもあらず、隨つて彼等の如く冷かに悟りすて、諦め去るべきにあらず。如何に浮世を夢と悟りすつればとて、我等は尙ほ時に「何の木の花とも知らぬ匂ひ」にだに心躍るにあらずや。言ふこと勿れ、これ一念の迷なりと。これを一念の迷なりとするも、我等はなほこの迷の迷を重ねて休まざる已みがたき至深の要求を有するにあらずや。嗚呼誰れかこの深き神秘の扉を開くものぞ。第三、「諦める」は敵に背を見せたる言葉なり、其の態度は浮き足也、逃げ腰也。彼等「あきらめの門」の勇者は、因果宿命てふ大敵の壓迫に堪へずして、其の鋒先を避けて消極的安心を買へるものとやいはまし。所詮、宿命てふものは、彼等に取りては譯のわからぬ妖怪なり、そは竟に彼等と何の交涉なし。既に交涉なし、かるが故に彼等は如何に之れを駕御し、統率して、其の人生觀、安心觀中の一位置、一要素に

攝取すべきかを知らざるなり。是に於いてか、彼等は一切之れを空了斷離して涅槃寂靜の大死境に入るか、然らざれば其の無意義、不可解の跳梁に打任せて、自らはかゝる大世界の嵐を餘所に、一切の運命を無頓著に、唯だ〳〵深く自家主觀の一城に閉ぢ籠もるの外はなきなり。見るべし、この一類の安心法は、餘りに世間外界と絶縁し過ぎたる、餘りに天地萬有と自己とを二つに割ち過ぎたる安心法たることを。一切萬有は、彼等に取りては空華幻影なるか、然らざるまでも何の意味も價値もなき、隨つて何の交渉もなき物質的、機械法の流行に過ぎざるなり。一言すれば彼等の安心は、一切の内容を排斥して成れる、謂はゞ、空洞の如き墳墓を家とせる安心なり。嗚呼復た寂びしからずや。如是の安心法果たして吾人

全人の要求を滿足せしむるを得る乎。聽けよ、彼等が空視し、回避し、排斥せる一切萬有は、さしも冷やかに抛ち去られたる既失の正當なる權利を取り還さんとて、彼等が胸臆の底より一種堂々たる權威をもて叫びつゝあるを。彼等はこの權威ある聲を聞かざる乎、若しくは強ひてその聲に耳を塞ぎたる乎、いづれにもせよ、かくして彼等「あきらめ門」の勇者は、概ね墳墓若しくは淋びしき野中の三昧堂に、究竟の安心なき安心の隱家を見出だせるなり。去つて「信賴門」の勇者を見よ、彼等の安心は寂びしからず、冷やかならず、枯槁ならず、消極的ならず、歸依信樂の融々たる情調、不斷に其の心の底深く充ち滿ちて、自彊不息の健闘的精神、常に其の表てに湧く。彼等は己れを擧げて大靈の

意志に信頼す、其の信頼や絶對的也、故に一切に意味あり、
目的あり、鑑照あり、攝理あり。如何なる不幸災禍の中にあ
りても、彼等は尚ほ感謝し、讃美するなり、彼等は冷やかな
る運命の鞭にだに、尚ほ涙に餘る深き慈愛の意を繋けて、其
の矢面より遁げず、隱れず、大膽に之れに面接して、之れに
打ち克ち、之れを我がものとし、かくして之れをわが人格の
發展、理想の具とはするなり。彼等はせむかたなさに、絶望
的に諦めるにあらず、喜び望んで、どこまでも信頼するなり、
彼等は「爲むかたつくれども望を失はず」。彼等は神に屬する
必勝軍の勇士也。
信じ頼むは即て愛する也。愛なければ信頼なく、信頼なけれ
ば愛なし。人、天地の大靈を信愛して、相交はり、相抱く、

而してこの靈交の意識の中より、蔚として湧きいづるものは、
「吾れは神之子なり」てふ意識也。(この一意識に到達するま
でには、何人も幾多の煩悶苦惱の經驗なきを得ざるべし)。
意ふに、世にこの「神之子」てふ一意識ほど、人をして自己
の尊嚴と謙遜とを最も正當に自覺せしむるものはあらじ。か
の自己を神と同じ位置に引き上げて、寂然として一切空と觀
する知力的超人の自大矜高(而かも中に墳墓の如き空虛の感
を孕める)や、又かの自己を「自然」と同じ位置に引き下げ
て、「我」を因緣假現の一砂一塵とし、「同じ天地に湧いた蟲」
と觀する訕抑自小や、共に吾人人類の天地の間に於ける眞地
位を自覺したるものと謂ふべからず。「神之子」の自覺者は之
れと異なり、彼等は一面、天地の神を父と呼ぶの光榮無上の

權威に立つと共に、他面には謙々として其の聖意を奉じ、其の經綸に與り、「天の父の完きが如く完く」ならんことを勉めて息ます。彼等は常に、深く神の懐ろに在るの大平和、大安心に優游すると共に、一方には理想の神之國を此の下土現實に施かんとして、不斷に向上し、自彊す。一切は彼等にありては、夢ならず、無意義ならず、萬有も自己も所詮は皆神性實現の一肢節、一機關たるなり。かくして一切萬有は、彼等が安心觀、解脫觀の中に、皆それ〴〵の光榮ある位置及び價値を有し來たる。「信賴門」の勇者の偉大は、「神之子」の眞自覺を有する所にあり。

「信賴門」の勇者にも、時に涙あり、悲哀あり、苦悶あり。これ實に人生の事實也。彼等はこの事實を夢まぼろしと掃ひ去らず、事實はどこまでも事實として、正直に大膽に之れに面して、回避せず、眼を蔽はず、而かも又之れを盲目無意義の宿命の跋扈と觀じて白眼に諦め去らず、神を信ずるの信を以て之れを打克ち、進んで之れを受け、進んで之れを神意實現の藥籠中のものとはするなり。かくてぞ我等が荊棘しげき人生の行路にそゝぐ涙も、なか〳〵に慰藉の力草なりける。信ずる者の涙は淋びしからず、涙そのものが彼等の喜びを深うするなり。古聖に敵は、石にて打ち殺さるゝ刹那、その顏貌の天の使の如く輝きぬといへり。

萬里征戰の最愛の一人子の身の上如何にと、明け暮れ氣づかふやるせなき老翁媼の憂思は、果たして夢乎、否、夢にあらす事實也、彼等若し、其の一人子の竟に敵彈に斃れたるを聞

かば、何事も我が世果敢なき宿命の約束と諦めん乎、但しは又祖國人道の爲めに神の劍を把つて光榮ある戰場に斃れたるわが子の武運拙からざるを觀じて、斷腸の涙と倶に感謝信樂の一念を神に捧げんか、前者偉也、後者は更に偉也、我れ今彈丸雨飛の間に立てり、是れ夢乎、否、夢にあらず事實也、そも〳〵我れとは何ぞ、如何にか成り行くべき、吾が窮極の歸趣落ちつきどころは何ぞ、如是の一念一たび發し來たらんか、安心問題の解釋は、佛者の所謂頭燃を拂ふの急なるよりも急なるなり、是に至りて諸君は謂ふ所二法門の何れを擇んで、この人生の一大事を決定せんとはするぞ。

「あきらめ門」の勇者の偉大は、神なく、神之子の自覺なく、且つ萬有を抛ち棄てたる偉大也、「信賴門」の勇者の偉大は、神を見、神と和らぎ、神之子の自覺を有し、且つ一切萬有を合せ攝めたる偉大也。後者はそのいと微小きものだに、尙は前者の最も偉なるものよりも偉也。さらば如何。吾等如何にすれば眞に神を見、神之子の自覺を有する「信賴門」の勇者たることを得べき乎、是れ容易の談にあらず。予輩は先づ諸君に向つて、世界が曾て産したる最も偉大なる「信賴門」の勇者、耶蘇基督を研究し、其の人格に親炙せんことを望む。是れ眞個の安心門に入る最も確實なる第一歩也。（完）

小説

村の名物

中村春雨

（一）

『己が村さに名物こざる。お生辨天、八幡藪』

野良歸の、若い女達が、小禽の如く樂げに、聲張り上げて唄ひながら、西に低き林の中に眞紅に燃えて沈み入る夕日影、燐脂に橙黄色を熔き込んだやうな横雲の反射を血色善き頬邊、手足、鍬の先に光らせつゝ、屋前の田圃の、畦路傳ひに辿りゆく姿を椽先の冷き柱に凭れかゝつたまゝ、眤と見送つてお生は不覺、はら〳〵と涙をこぼした。

村の名物、八幡藪の持主、畑儀作の許へ、此も同じく村の一名物に數へられて牛辨天と持囃されてゐたお生が嫁入つて來たのは一昨年の秋であつた、儀作は幼い時から他の子供が飴ん棒を舐ぶつたり、肉桂水に舌打するのは見向もしないで玩弄の笛を吹いたり、太鼓を打つたりする事が、大好きで又上手であつた、尋常科を卒業する頃には、自分で、裏の藪か

ら、擘生の篠竹を切つて、穴を鑽み、膏を抜き、器用に小い笛を作つて、鎮守の祭禮の日の夜などには、篝火水底に動く田圃路を吹流して歩いて、白粉の中から顔を出したやうな村の娘連に邊を取巻かせ、腰に梓の弓を張つた白髪頭の、爺媼を驚かして『大人だつて叶はねい、旨めいもんだア』と口々に賞めそやされた。

高等の三年になつた頃、村へ尺八の先生が流れ込んで、農事の隙間々々に、若い者らは稽古を遣りに集つてゐたが、儀作も習ひに行度つて、父に願ふて見たけれど『藝人にするぢやアねいンだ、學校の課業勉強するが善わだ』と頭から叱りとばして、受附けてくれない、子供心に、一旦は思ひ留まつたが、それでも夕づゝの影ほのめきそめて、庭の老松に這ひ

かゝれる凌霄花の、紅ちら〳〵と涼風にひらめく頃を遠の方から尺八の音がゆかしく響いて來て、かしましき蛙の聲にも紛れず、耳を擽るやうな心地がすると、もう堪らなくなつて、密と裏木戸から脱け出して、その尺八の音を手繰りつゝ、綠小暗き樺林の奥の瓦の軒傾きかゝる舊庄屋の座敷を頽れ塀の外から覗かるゝ處へ忍び寄つて、一心に聞惚れて、夜露に額髪の濡るのも忘れて立ち盡してゐる、稽古が濟んで若い者等がやや〳〵、鴉が巢を突かれたやうな騒をして歸つて行く後から、低く口笛を吹いて家路を辿るといふやうな事が毎夜續いて、到頭父に看破られ、嚴い折檻の上、倉庫の中へ押込めて錠前ピンと卸されて了つた、定めて、もう閉口したであろうと、日暮れ方親心に、氣遣ひながら、倉庫の方へ急い

で行きかゝると、微かに、尺八の音がしてゐる、訝かしく思ひながら、若い者が何處かで吹いてるのだらうと、耳に手を當てゝ彼方此方見廻しつゝ扉へ近づいたが、音色あざやかに耳も澄むやうな呼ばれた調子が、倉庫の二階で響いてゐる、慥かに二階の窓の邊から聞えてゐる。

驚然として立留まつてゐたが、やがて鍵で扉の錠をこき上げて、入つて見ると正しく二階の上、梯子段を駈け上つて行くと、人の來るのも心附かぬ樣で、鎧櫃の上へ腰を卸して、横向になつて一心に尺八を吹いてゐる、古錦襴の袋が傍に投げ出してあつて、桐の箱は蓋を取つたまゝである。

『儀作……』と聲をかけたが、返答もしないでほの暗い中に頬を膨らせて、額を眞赤にして肺臟の息を一竿の笛に吹き込んでゐる。

『儀作、飯だ、下りて來……』

『飯欲くねら……』云つたまゝ又吹き始める。

『儀作降りて來い、もう腹減つただんべい』

何をと云はぬ許、一寸白い眼を見せて、朗々たる響、玉流るゝが如く、劉喨たる音色、金を磨するかと、いみじく邊に反響するのであつた。

父も遂に我を折つて、公然に、尺八の先生の許へ稽古に通はす事となつたが、瞬く間に上達して、若い者等は後の鳥に先を越され、先生さへも笛を投げ出すやうになつて了ひ、それから程なくこの村を去つたのである。

儀作の尺八は村の名物になつて、近郷十ケ村の祭禮や、盆踊

や、祝事、集會事、何ぞといへば、馬か駕籠かで迎ひに來る禮物を差し擔ひで送つて來る、家は相當の財産も蓄へてあつて、萬事に不自由せぬ生活の、父は昔氣質に又しても辟はつてはゐたが、先方から泣き附く樣にして賴まれるので、なか〳〵辟り切れないのであつたら

儀作、高等小學を卒へて、直ちに東京へ出て、天下の名手に弟子入して、天晴れ斯道の奥義を究め、一竿の笛に天の音色をこめて、下界の塵を淨めんとする心願いと切であつたが、それ許はと、父は肯かず、實は汝の祖父さんに當る人が江戸詰めの武士で、風流韻事に心を寄せ、琴、三味線、琵琶、尺八、何んな遊藝でもをさ〳〵黑人筋に劣を取らず、器用千萬な御人であつたが、その爲、大切の役儀を疎かにして、遂に家格を潰し、百姓に成り下つたやうな次第だから、外の事なら兎に角、遊藝じみた事で身を立てやうとは、決して思ひそめてもならないと、涙を片手に握つての說得。

儀作は寧その事、脫走せんかとも思つたが、その中、村の辨天と呼ばるゝお生と言葉交す仲となり、胸の不平を、戀の甘酒で忘れて、晴れて夫婦となつて後も愈睦ましく笛に切る八幡の藪には筍が生ひ繁り、お生辨天の靈驗もいとあらたかに、名物の三拍子を揃へた畑一家の幸福は近鄕十ケ村の羨望の的となつたが、呪の矢に射拔かれたものか、程なく親は世を去り、儀作の弟の喜作は山へ惡戲に行つて胡桃の樹から辷り落ちて生れもつかぬ跛足となり、儀作は又今回の戰爭で召集されて、旅順の二〇三高地で、あはれ、その尺八の笛と

共に砕け、花々しい戰死を遂げたとの報知が來た、取り殘されたお生は、もう地に打伏して狂氣の如く泣き叫んだのであ
る。

今しも、村の若い娘が、心なく唄ふ野良歌に、ありし世の樂しさが、今更悲しく古疵の傷み出したやうに、骨身に應ねて、お生は、つい涙が胸を突いて迸しるのであつた。

（二）

『ア、忌だ、忌だ、己ア もう寧そ死んで仕舞ひていや』長太息を吐いて、身を投げ出すやうに、疊の上に打ッ据つたのは、跛足の喜作である、顏は酒に照れて赤黑く、眼は怪しく血走つてゐる。

空想の夢から醒めて、お生は振返つて昵と見たが『喜作さん、汝は又酒飲んで來たいね、あんなに私云ふてるだに聞いてくれねえで、眞實に困るでねえかね』

『姉さんも困るか知んねえが己も困るだアよ、依賴にするだから他が馬鹿にしやがるんだし、己ア不具者で一人前の働き出來ねえ兄貴は死んぢやつたし、酒でも飮んで醉つた間でねえだと些とも善い氣持にしてられる時やアねえんだ、それだのに、今日なんか、己があの酒屋で一杯引かけてると、村の若い者等が、尺八持つて寄つて來やがつて、さんざつぱら己に弄ひかゝり『喜作さんは彈く事は上手だが、兄貴のやうに吹く方は出來ねえだね』つて……跛足だと思つて好きな口叩いてるでねえかね、己腹立つて五合德利、框へ叩きつけてやつたら、酒屋の亭主ぶつ〳〵云ふて怒り出す、若い者等愈

尻馬に乗りやがつて、村の名物男の儀作さんは戰死して了ふだし、お生辨天は、あの……あの……』と口ごもる。

『エ、何うしたいつて云ふだね』と、お生は身を乗り出した。

『あの、汝のやうな無益な虫に附かれたいつて……跡方も無い事を云ひやがるでねいかね』

『エ、虫に附かれたつて……』と背骨叩き折つてくれべいと思つたい……』

『己、眞實に、摑みかゝつて『世間の人はそんな事云ふてるだかね、恐ろしいでねいかね』と身内が悚々するやうに肩先を窘める。

喜作は、熟柿臭い息を吹いて『眞實に、世間の口うるさいだから油斷も隙もならねいだがね、此でも己が不具でねいで、尺八の一つも吹ける樣な器用な男だと、他の口にかゝつても不思議ねいか知んねいが、こんな無益な體で、有りもしねい事云はれるだど、姉さんの御迷惑察しるだよ』

お生は眉をひそめ、嚴しい顏をして『腹からの兄弟でねいだと、怪しな事でもあるやうに世間の人は思つとるだかねい、私は喜作さんを眞身の弟だと許し思つてるだがね』

『己も、兄貴がまだ歸つて來るべいと氣がしてなんねいだがね』云つて、今更のやうにお生の顏を見入つて『村の若い者等にあんな惡口吐かれるだと、己だつて、兄貴の弟だ、不具者だから戰爭に出て打死する事なんねいだが、尺八の名人に

ならなれねゐ事はあるめゐ、村の名物亡くなつたら己が村の名物の後續してやるべいふ氣にもなるだアね』仔細らしく小首を傾げてゐたお生も氣を變へたやうに『そりや善ゐ發心だと思ふからね、喜作さん、一番一生懸命に稽古して見るが善ゐだ、外に樂ねゐから酒飲んで體惡くする事になるだ、儀作さんも喜ぶべゐ、村の若い衆がゝ吃驚する程上手になつたら、惡口吐くにも吐かれめゐからね』『己が兄貴の後繼がれるやうになつたら、姉さん……』と、云ひさして、頭を押へてゐる。

『何云ふてるだね』

『今だつて世間の人は疑ふてるだからね、然うなつたら公然にゝあの、夫婦になつてくれるだかね』

『汝、何云ふだツ、眞身の弟だと思つてると今云ふて聞かしたでねゐか』と鋭い調子

『世間の人が承知しねゐだ』

『汝醉ふてるだね』

『醉ふちやゐねゐだ』

『些と野良の風に吹かれて、兄さんの墓に詣つて來るが善ゐだ、醉が醒めべゐから』憐むやうに云つて、床の間の、錦の袋から一竿の尺八を取り出し『さア、是持つて行つて、兄さんに敎へて貰つて來るが善ゐだ』

喜作は呆氣に取られてゐる。

『早く行つて來るが善ゐだ』と尺八を手に持たせて、押出すやうに戸口へ追立てゝ、行く

（三）

『己ら尺八上手になつて、村の名物の二代目になつちやたら、お生さん、己の女房になつてくれねゝ事ァねゝんだ、吃度なつてくれるに違ひねゝ、何、己だつて笛も吹いたゝ、盆踊の太皷も打つたゝ、兄貴のやうにあんまり好きぢやねゝだつたゝから、一生懸命になれなかつたゝが、遣る氣になつたら遣れねゝ事ァねゝんだ』繰返し〳〵、夢中になつて歩いて行つたが、田圃の傍を劃つて、小高く盛り上つた芝山の、鬱然茂る杉の木立の中から、ちらほら、石碑が見えてるのが村の共同墓地である、葡萄鼠の空に片われ月が白く光りそめてゐる、爪先上りに、喜作はヒヨクリ〳〵上つて行く。恰度、一抱もあるべき杉の根方に、白く削つた、丈餘の墓標『故歩兵上等兵勳八等畑儀作之墓』と、筆太に記されて、側面に旅順戰死の旨を書き附けてある、樒の葉青々と、今朝お生が供へたらしい線香が白く灰になつてゐる、暫らく墓詣にさへ來なかつた喜作は、今更襟をかい繕ろふて、酒の醉も大方は醒め心地、合掌禮拜すると、瞑つた眼の裏へ兄の姿がありく〳〵と現れて來る。

兄の尺八は村人を慰め、樂ませ、悲める者の眼からは涙を拭ひ、剛情な者の瞳には靄味を覺えさせて、近郷十ケ村に妙音を鳴りひゞかせたのである、人交際も信切で、情に厚く死んでは讃國の鬼となつた、成程村の名物である、その弟の自分は何うだ、跛足で、無能で、僻み根性許り強く、始終酒に醉つ拂つて村の者共と喧嘩口論……『ア、濟まねゝ、濟まねゝ

『……』と、不思吱いて、眸を拭つたが、俄かに屹とした顔色になつて、尺八の歌口を濕した。

心に念じながら、呼吸を吹き込んだ、フー、フー……と何うしても音が出ない、十度試み、二十度試み、蟋谷には油の様な汗が湧いて、額からは熱い血のやうなものがたら〳〵と滴つた、二聲三聲つゞいては途絶れ、途絶れては、又つゞく、胸苦しくなつて、眼先がくら〳〵として、ばつたり尻餅を搗いた。

つい兄貴の睨み附けるやうな顔が見たので、驚いて飛上り、歌口に懸命の息吹き入れて、うろ覚えの指のあやつり體中大汗になつてさまん〳〵に工夫を凝らしたが四聲五つ聲が關の山、もう呼吸が續かなくなる。

『ア、己ア何うしてこんなに鈍に産れ附いたいんべい』嘆息しつゝ、尺八逆手に、丁と片腕を打つて、又持ちかへて、今一方の二の腕をしたゝかに擲り附ける。

黒い影が墓の上をおぼろげに、杉の根方へ動いてゆく、驚づこして立窘んだが、振り向いて見ると、月の光は青白く杉の梢は黒く闇を隈取つて、林の奥を見入ると、洞窟のやうに眞暗である。

『兄貴、己ア無益者で何一つ取り得はねいだ、戰に出る事も出來ねいだからこの命持あましてるだ、せめて尺八吹く事でも敎へてくんねべ、お願ひだからね、一生のお願ひだからね、これ出來ねいなら己首縊つて死んぢまふべい……』

さらく〳〵と杉の葉の囁き、喜作は耳を傾けたが、何んだか兄

の聲が聞にたやうに、俄かに勇み立つて、尺八を取直した。

もう石像の如く堅くなつて動かない、笛の音は斷れ〳〵に、絶ゆつ續きつしてゐたが、夜は次第に更けまさり、星は銀光を放つてきら〳〵と滿天に燦めいてゐる、風はしきりと杉林の奥に唸つて、地の夏草に戰いで、樒の葉も墓と囁き交してゐるやう、夜露はしつとりと降つて來た。

夜深の尺八の音を咎むるやうに、調子外づれに梟が鳴き出す、それが濟むと頓狂な月夜烏が渡つて、村では一番鷄の聲、東がほの白くなると烏が又本氣になつて噪ぎ立てる、鷄が勇ましく鳴きしきる、犬も吠へる、もう黎明である、喜作は唾が涸れて、舌が上顎に引附いたやう、尺八を堅く〳〵握り締めて慄ゐてゐた。

家へ歸つて行くと、お生は眞蒼な顏をして『まア、汝何うしたね、私迎に行くべゝ思ふたいが、今に歸るだんべい〳〵と待つてる中に夜が明けたい、墓の前で汝通夜したいかね』『兄貴己に教へてくれるだから、歸る事ならんねわだゝ、、、』と凄い笑ひ聲を洩らした、瞳が怪しく光つて、眼尻は釣上つてゐる。

『汝が一心になるだと、そりや儀作さんも汝に憑り移つて來さつしやるべけんど、夜露に打たれて通夜なんかしねわが善だ、體が續かなくなるだからね』

『何、心配する事ねわだ、尺八上手にならねわなら、死んだが增だ、死ぬだ……』

朝飯を濟ますと、又尺八を抱へて飛び出さうとするので、

お生は強いて、引留めやうとしたが、遮二無二振り切つて、駈け出して了つた。……

夜は夜通し、朝も、晝も、食事さへ濟むと、魔が招くやうに、あたふたと家を飛び出して兄の墓所へ行つて、尺八の歌口に喉を涸らし、心臟の血を注ぎ込むやうな熱心、三日坊主の譏さへ早く後になつて一週間經ち、十日經ち、一月は瞬く隙、村の子供は、乞食の狂人が墓地で尺八を吹いてると噂に立て出した、喜作は、髮長く額に亂れ、骨高く頰に峙ち、凹んだ眼は爛々と奥の方で凄く光つて、いかにも狂人の如く、唯、魂を抱いてるかとばかり大切に一竿の尺八を懷に、嘗て手を放さないのである。

（四）

墨を流したやうな黑雲が、見る〳〵薄鼠色の空に浸透んで行つて、雷がごろ〳〵鳴り始めると刄のやうな電がしきりに閃めいて風が颯と前の青田を渡り、裏の竹藪がざわ〳〵と大波の搖れる如く、搖れ出したかと思ふと、ぽつり〳〵雹のやうな大粒の雨、庭先の乾物を周章てゝ取り入れる間に、もうざアざアーッと、大地を穿つ許の大雨、椽先は宛で洗つたやう、雨戸を繰る肱先が、びつしより濡れてぽた〳〵袖から雫が垂る。

晴れるか〳〵と待つてゐても容易に晴れ上らない、少し小降かと思ふと雷が又激しく鳴り出して又降つて來る、喜作さんは何したであろ、嘸困つてるには違ひないが、迎に行くと云つても、この降り、この雷……早く止んでくれゝば、善

いにと、お生は獨、やさもき氣を揉んでゐたが、その中、日も暮れかゝつて來るし、夜になつたら愈難儀と、漸く心を決め、裾端折つて、水色メレンスの褌に膝を隱し、高履突掛け、雨傘の下に小く身を縮め、例の墓地の方へと小急いで行く。

山の下まで來た時には、袂は濡れ、足は泥を被つて、身内冷わ切つてゐたが、偶と、尺八の音が耳に附いて來た、雨は、横にしぶいて路を埋むる夏草は青々と蘇生つてゐる。

尺八の音は次第と近附いて來るが、聞覺のある六段の譜曲、節廻し巧みに、音色も冴え切つて何んだか斯う引入れらるゝやう、月の夕を、花の旦を、夫儀作が心ゆくまで吹き澄ましてゐたその尺八の音を聞くやうな思ひがする、何んだかその音色が自分の耳から出て行くのではあるまいかとも思はれる、イヤ、慥かに山の上から聞えて來るのだ、儀作さんが墓の中で吹いてるのが聞えて來るのかも知れない……イヤ、儀作さんが蘇生つたのだ吃度蘇生つたのだ。……

『儀作さんかも知んねね』夢中になつて呟いたが、俄かに素跣足の、傘を肩に、夏草の中を分けながら息を喘ませて跳んで行つた、雨は又ざアーッと降り出して來る、雲の斷れ目から夕日がぱつと射しかゝつて、銀の矢が大地を射すくめるかとばかり。

墓の前のぬれた石の上に腰を卸し、長い髮は油を塗たやうに雨で洗はれて、肩から袖から濡れ鼠になりながら、譜本もびつたり、墨が流れかゝつてるをそのまゝ、膝の上、一心不

亂になつて、尺八を吹いてゐる、音は遠く澄んで、清く邊りに流れて行く、竿を傳ふて雨は金露の滴るが如く、夕陽はばつさ杉の梢にかけて、この凄慘たる光景を金色の刷毛彩色の中に浮立たせて見せた。

お生は茫然として佇立つてゐたが、やがて走り寄つて、傘をさし翳した。

尺八の音は、一糸亂れず響いてゐたが一曲終ると顏を向けて『姉さん、御苦勞かけたいね』

『お生……』といふ聲がかゝるかと思つてゐた、儀作さんが蘇生つて『お生……』と云つてくれるだらうと、ついそんな氣がしてゐたが、矢つ張、喜作であつた。

『喜作さん、汝、旨くなつたいね、儀作さんが生き返つたかと思つたよ』

喜作はニヤリと笑つて『然うけね、兄貴、敎へてくれるから旨くならねちやなんねゝね』

雨が一しきり、降り募つて來るので、お生は無理から喜作の手を引張るやうにして、連れて下りる、喜作は相不變、尺八を吹いてヒヨクリ〳〵下りて行く。

村の人々は、雨中の尺八の音に驚かされて、戸口へ出て見ると、喜作が吹いて行くのである、皆眼と眼を見合せて『儀作の死靈乘り移つたいね、それでなけりやあんな鈍な奴が俄かに尺八なんか旨く吹けやう筈ねわだ』と喚めいてゐる。

居酒屋の前を通つた時、亭主が戸外へ飛び出して見て『儀作さん、戰死したつて嘘だつたな、お生さんと一緒に、尺八

吹きながら歸つて行くだ、慥かに儀作さんに違ひねえ』

『だつて、脚見るが善え、跛足でねえか』と、嬶に云はれて、暫しは、眼ばかりぱちくりさせてゐた。

（五）

親族の間から、お生と、喜作と、改めて夫婦にして畑の家を立てさせるやうとの相談が起つた時、お生は別に異議は云はない『よろしきやう』との挨拶であつたが、喜作は反對に頭を振つた。

『いけねえ。いけねえ。兄貴は死んぢやつたんぢやねえ、生てるだ、此世に生きてるだ、己が尺八吹く時や、兄貴が己の體に憑り移つて來るだ、姉さんは、矢つ張り、兄貴の女房で、己の姉さん、此何年經つても異りはねえだ、人の目にや見ねえでも己等は兄弟三人、この家に暮してるだ、、、、と』凄く笑つたのである。

『己が村さに名物ござる、お生辨天、八幡藪』

村の娘が、無心に唄つて行くのを聞いた時に、この後はお生の片頰には嬉しさうな微笑が見えたであろう。（完）

小說　まごころ

森の乙女

（上）

「伊佐さん、貴女如何したの？」年の頃は廿餘り二つか、

三つか水際だつて美しい伊佐子の傍に立つて、片手をベンチに、差覗くやうにして言つたのは、従兄の名を春海といつて、外浪子爵の世嗣の君、學習院を優等で卒業してから、外務省の椅子に敏腕家として當時隱れもない、天晴れの貴公子で有る。

「私？　如何もしやしませんの」横をむいた儘で伊佐子は素氣なく言ふ。

「だつて可笑いちやァ無いかね」

「貴郎こそ餘程可笑しいわ、奈何もしませんつて言つてるのに……私さへお覺んなされば直ぐに伊佐さんは變だの、お可笑しいだのつて仰有るんですもの」と上目使ひにちらりと見上げて淋しい笑を含んだが、直ぐまた俯向いて。

「貴郎の方が餘程御無理ですよ、何んと言つたら好いんだか」ほつと少さな吐息を吐いて

「私には解らないわ」

「僕にも解らんね」腕組をほどいて、春海は投げ出すやうに言ひながら、手近のゆすら梅の實が青葉に交つて、珊瑚珠でもかけたやうな眞赤になつて居るのを、無意識に撮んで前歯で一寸かんでは地に敲きつけながら、その度毎に目をうばふやうな寶石の輝き、女夫紋を高刻にしたカフス釦のけやけき光、伊佐子は凝と見て居たが。

「春海さん」ふと呼びかけて、暫時躊躇つてゐたが思ひ切つて。

「春海さん、私ねあの私、始終左樣思つてるのよ、華族だ

の、やれ金滿家だのつて、隨分都合がよく出來てるのね、」

一方には私の知つてる人の中にだつて夫れは〳〵氣の毒なのが幾等も有つてよ、父樣も兄樣も戰死遊ばして仕舞つて、唯つた一人の母樣も御病氣になつてね、御家は段々困つて來るし、もう仕方が無いから、今迄は御嬢樣〳〵つて言はれて居た方が此度は御奉公に出るやうになつて了つたの、私その話と聞いた時には眞實に泣さましたよ、如何うかして上げ度と思つて、學校のお友達が集つて相談までしたのですけれども、その方はね御國の爲だからつて、悲しいとも被有らないんですよ、それを考へると眞實に最う貧乏な者は可哀想ですわねえ、それだのに世間は實に種々なもんだと私此頃つく〴〵思ひますの、貴郎のやうな方も有るし、ねえ春海さん、貴郎明日お立ちなすつて、倫敦に行らしやるのは何んでお出で遊ばすの？」、屹となつて打目戍る眼の裡凄として、常の氣の弱い伊佐子がと春海は訝しさうに眉根を寄せて居たが、忽ち笑ひに消して。

「ハ、、、、何と言つてるんだね、伊佐さん」とお可笑しさを堪へて、香の高い絹手帕で口の邊を靜かに拭ひながら。

「那麼つまらない事なんぞ言はないでも好いさ、夫れよりかね、此度歸朝時には伊佐子さんには何を土產に持つて來やうかなあ、指輪が好いか、それとも時計？、何か吃驚りするやうな物で一つ驚かして遣らう、華枝は襟止に腕輪、是れや何かに記して置かないと忘れやうものなら大變だ」

「春海さん私なら其様なものは入用ませんよ」

「何故、何故、」

「でも欲しかア無いんですもの、貴郎のやうなお方に頂いたりすると……私、亡くなつた……」

「ハ、、、次男君に申譯がないとでも仰有るんですかね」

「はア」

「やア是れは恐れ入りましたなあ、どうも伊佐子さんの御見識には感服の他有りませんなア」夕日は斜に葉越しの青白い光を浴せながらも伊佐子は血の色うすく、ほんのりと瞼を染めて、截の長い眼に見詰めて居たが、眼を伏せると凝と一處に視線を落して。

「春海さん、貴郎何んとも無くつて、世間の人は知りませんし、貴郎だつても外國へ行つてお仕舞ひなされば御無事ですし、それは全く結構ですけれども……夫れでは、夫れでは餘りぢやア有りませんか、然う申したら夫れは私は次男が戰死をしたから、それで言ふんだと思召しませうが、私は決して、決して、華枝さんは羨しくは有りませんよ、かへつてお可哀思だと思つてよ、」と言ひかけたが俄かに胸が迫つて、後は次けず、はら〳〵と溢こぼるゝ涙を押へて差俯向くと、尚も留度もなく縞をなして流るゝを拭ひ取つて、手帕を啣へたまゝ、瞳をうつすと端なくも眼に入る垣のほとり、地はさながらにむら消の殘る雪のやうに、見るから儚いさまに咲き殘つて居る卯の花、あゝ丁度今頃で有つた、此度卯の花の咲く

頃には僕ばもう石にでもなつて居るだらうね、と言つて、其時は冗談にして笑つて居たものを、あゝ早いものだと思はず太息を漏して、眼を閉づればまざ〳〵とその頃の有様、今眼のあたりに見る心地のする、次男が名譽の戰死を遂げて、滿洲の土と化してからはや一年餘り、別れたその時もう覺悟は極めて居たものゝ、萬一の希望は絶たなかつたのに、今霄た一人でこの卯の花を眺めやうとは思はなかつた。

いつか日は落ちて、其處ともなく夕ぐれの色迫つて、颯と音訪ふ風は冷やかに袖や裳を吹靡かせて、折から身に泌入るやうに、覺わず襟掻き合す、と又しても花のほろ〳〵と散りかゝる、春海は腕拱いて傍の樹に凭れ掛つた儘、頭を垂れて物思ひに沈んで居るのを見ると、伊佐子は急に何ともなく、可

哀想のやうでも有り、氣の毒のやうでもあり、華枝が再び自分と同じやうな、儚い思ひをくり返へさせるのが什麼〳〵憐れになると、そゝろに氣も弱く。

「勘忍して頂戴、春海さん、華枝さんがお可哀想ですわ、貴郎がもしか召集でもおされなすつて、また……あの……なんのやうに戰死でもなさるやうな事があたらば……御免なさいよ春海さん、此樣な事を言つて、先になつて、貴郎氣になすつちやア厭ですよ、ねゝ春海さん、濟まないわね私が、私がほんとに惡るかつたの」とばかり聲を呑んだ、その時背後で人の氣勢がして。

「伊佐子さん奈何遊ばしたの」

と淸い聲、伊佐子の肩先に輕く手を置いた、稍小造りの、セ

ルの單衣のおらい縞に、絹縮と博多の打ち合せを少さくきり、と結んで、素足に緋天の緒の雪駄を爪先に抜けさうに引きかけて、すらりと立つた華枝は今年十八の極めて美しい姫で有る。

伊佐子は潤んだ眼を擡げて。

「ついね、つまらない事から色々な事なんぞ考へ出してホ、、、、お可笑しいわねね」と元氣よく打ち笑つたが直ぐもとの淋しき顏をして。

「華枝さん、お掛けなさいな」

身を譲つて態とらしく莞爾するも、華枝は麗艶に微笑んで、春海を見顧りながら。

「あの兄樣は……何を其樣にお考へ遊ばして居らつしやるの？ホ、、、、伊佐子さん、兄樣が彼樣な眞面目なお顏遊ばしてホ、、、、」堪へがたく忍んで何か言つて呉れるで有らうと、常の調子で話かけたが、春海も伊佐子も取り合つて呉れないのに、いさゝか拍子抜けがして、もぢ〳〵して居たが、何か急に思ひ出したやうに。

「あの伊佐子さん、先刻ね、あの方が來被したのよ、あの牧山さんが」

「あら、牧山さんが……、まア、お一人でしたの？」

「はア、誰樣もお連れなさら無かつたやうでしたの、而してね何が御用がお有り遊ばすんですつて、急いで居被した

わ、夫れからね、何んですが明日お暇なら是非お越し下さいつて、ですけれども明日は鐚目でせう、直ぐお断りして了ふが知らと思つたんですけども、まア伊佐子さんに伺つて見てからと思つてね、参上れるか如何だかは解りませんと申上げといたのよ」

「まア如何も有難う、何んの用なのでせうね」

「私にも解らないのよ、何んですか知ら、その時ね、餘程申上げやうかと思つたのよ、明日は兄様がお立ちですから、多忙しう御座りますつてね、でもねホ、、、、」

「ホ、、、、如何しても仰有れ無かつたのでせう、ホ、、、今子さんは能く知つてらしてよ」

「あら、まア、なにを？」華枝は何がなしに頬を染めて、

振り仰くと伊佐子がじつと打目戍つて居たので、はづかしさうに繊弱な手の甲で頬のあたりを押へながら。

「ホ、、、、」とばかりに笑ひに紛らせて眼を反らすと、春海を見返つたが、俄かに淋しさうな面をして。

「伊佐子さん、私ねほんとに最う明日つて日が來ないと甚麽に嬉しいだらうと思つてよ」

「つまらない、那麽事を言つたつて、仕方がないぢやア無いか」突然横合から口を差挟んだので。二人は齊しく眼をそ、くと、春海はつかつかと前に來て、今迄背つて見た事もないやうな、眞面目な、難しさうな顔をして。

「華枝さん、僕は散歩に行つて來るからね」と言ふなり、、、くるりと背後を見せて、小足早やに行きかける、華枝ははら

〳〵しながら、あわて、追ひ縋りて。

「まア春海さん、切角あのお話をしやうと思つて來ましたのに……あんまりですわ」とはや涙含んで見送つて居るのに、も構はず、春海の後姿は木蔭にかくれて仕舞つた。

忙然として華枝は。

「伊佐子さん」と斗りほろりとして差俯向いた。

「伊佐子さん、貴女何卒ぞね、私のた願ひなのですから、お兄樣の此度英國に行の事をね贊成遊ばして頂戴な、最う皆さん、夫れが好いと仰有つて下さるんですけれども……後生ですから伊佐子さん、私が思ふのには貴女が贊成して下さらないから、夫れで春海さんが何んだか行くのが心地よくないんちやアないかとね、私思ふんですの、それはね、兄樣が自分でお言ひのでもなし、又誰れから聞いたのでも無いの、唯だ私一人で左樣ぢや無いかと思ふのよ、私ねよう〳〵考へて見たんですけれども、奈何うしても然うとしか思はれないの」と言つて伏眼になる、伊佐子は事もなげに笑つて。

「私なんその言ふ事を氣にお懸けなさるやうな春海さんぢや有りませんよ、那麼事はで貴女が心配なすつちや耐らないわ、ホ、、、御親類の方達だつて皆さん贊成して居らつしやるのにホ、、、私一人位ひで……」

「夫れもね、矢張あの、貴女だから言ひますけれども……あの屹度、あの氣がとがめるのですわ」と聞き取りかねた程細い聲音で、やゝ暫時少さな手帕に顏を埋めて居たが。

「ですけれども伊佐子さん。貴女私を助けると思召して明

日だけは何卒ぞね、見送りに來被らして下さいましな、ね、お願ひなので御座いますから、最も皆さん行らして下さいますんですけれども……」

伊佐子は答へなかつた。

差俯向いたまゝ、あゝ次男が戰地に立つ時は如何だつたらう、父にも母にも早く別れて、兄弟といふものは一人も持たず、二三の親友と自分とばかり、外浪子爵家からは家從がたゞ一人、それも時間を忘れたと言つて遲れて次男には逢はなかつた、その寂しい〳〵見送りで有つたものを。

「伊佐子さん、貴女送つて頂戴ね、ねゝ好いでせう」

伊佐子はなほも默して答へなかつた。

（下）

その翌日伊佐子は牧山の家を訪れた。

かねて見知り越しの隔てのない間柄で有るから、門を入ると取りつきの玄關を右に見て、さゝやかなしをり戸を押せば、庭一面の芝生の彼方、築山を前にひかへた小座敷、それは夫人今子の居間なので。

「どなた？」内より今子の夫れらしい細い聲、衣の裳さや〳〵と音して、續いて障子がさらりと開いて。

「まア伊佐子さん、よく被來らしてね」と嬉しさうに莞爾として。

「久ばらくでしたのね」すり倚つて見上げながら。

「まア おくしが好くね、奇麗に出來ました事」

「あらつ、彼樣な事を仰有つて、相變らず お口が悪いの

ね、もう今日はね、すつかり出來そびれて了つて、幾ら結つても思ふやうにならないの、もう何んでも構はないと思つてね、まるめて來たのよ」

「夫れにしちやア大變よくつてよ、ようくお似合ひなさるわ、まア其樣な事よりかお上り遊ばせな」

「はア有難う、あの何んですつてね、昨日參して下すつたんですつてね、どうも失禮」

「否ねえ、あの一寸參つたの、急いでたものですから、私こそほんとに華枝さんに失禮したのよ」

「御用つて何？」

「まア悠りお話しませう、お上り遊ばせよ」

「はア、ですけれども、然うしちや居られないの、眞實に今日は急ぐんですから」

今子は先に立つて、壁際に重ねて在つた友禪の坐蒲團を端近く進めて。

「お敷き遊ばせな、ホ、、、何時でも、何時でも、いそぐつて仰有る方ね、たまには些少は悠り遊ばしたつて好いちやア有りませんか」

「でも今日は全く」

「ちやア何時もは嘘なのねホ、、、」

「否ね、もう眞實に今日ばかしは急ぐのよ、是れから直ぐにあの春海が倫敦に立つのですもの」

「春海さんが……ちやア矢張り眞個だわね」

獨り言のやうに言ふのを伊佐子は聞きとがめて。

「何なの？」答へのないので重ねて。

「何なの、今子さん？」

今子はたゞ笑つて居る。

「何よ、今子さん、私にお秘しなさる事は無いわ、甚麼な事でも打ち開けやうつてお約束ぢやあ有りませんか」

「だつて貴女、お憤りなさると悪いんですもの」

「大丈夫よ、憤つたりなんかホ、、、、那麼なさばけないんぢや無いのよ、是れでもホ、、、、」

「屹度よ、そんなら言ひますけども、何んだかね私ちよつと他から聴いただけなの、ですから能くは知りませんけれどもゝゝゝゝ春海さんねホ、、、、よしませう」

「仰有いよ、言ひかけてお休し遊ばすなんて、氣になるわ」

「だけれども眞個に貴女氣に掛けちや厭よ、好くつて、春海さんはね、外浪さんのお世嗣でせう、だから若しか戰爭にでも行らつしやるやうな事にでもなると、夫れこそ何んだから、夫れで此度倫敦に行らつしやるんぢやアないの？、私よく知らないのよ」

伊佐子はつとして我にも非ず、あわてゝ。

「其樣な、そんな事は有りやしないのよ、誰れがまアそんな事を……、嘘ですよ」

「私も嘘だと思つてよ」

「全く嘘よ、もしか那麼事を言ふ人が有つたら、貴女取り消しといつて頂戴な、眞實に厭だわ、全く嘘なのよ」

今子は意にも掛けず。

「ホ、、、、そんな事が眞實で耐るものですか」

言ひ捨てゝ奥へ行つたのでほつとして、伊佐子は思はずも額を拭つた。

春江花月夜の六枚折を立て廻して、所せまい迄に裝飾付けた八疊の室、奥深い床には大ぶりの花瓶に花菖蒲の見事なのが咲きかけて、掛花活にも少さなものが二枝三枝、あしらつて有る、青貝の光淋しい壁には萬里長征の人未だ還らずと筆太に徂徠の巾廣の掛物、ふと目に入ると伊佐子は引きつけられたやうに、じつと見て居た眼の次第にうるんで、物の色も得わかぬやうになつて、伏眼になるとほろりとした、あゝ次男は去つて再び還つては來ない、と又しても思ひ出されて

は、坐ろに涙含む。

「叔母樣、叔母樣」と聲高く呼びながら、廊下に足音を先に立てゝ、見たから愛くるしいのが敷居際に、莞爾〳〵笑つて立つて居る。

見るより伊佐子は。

「まア、美いちやん、大きくお成りなすつたのね、さあ叔母樣の處に來らつしやい」

「まア、お嬢樣おじぎも遊ばさないで、叔母樣が御行儀が惡いとお笑ひ遊ばしますよ」と傍から乳母に言はれて、お温和しく兩手をつく。

「あゝ好いお子だこと、まア、お重くおなりなすつたのね」

「まア好い事ね、美いちやんは抱いて頂いて」

何時か今子さんの後に來て。

「さ、向へ行つといで、母樣は御用が有るからね」

美代はふつさりとした髪を左右に打振つて。

「いや、叔母樣」

「まア叔母樣だつて、まだ叔母樣ぢやアお可哀想だわ、姉樣つて言ふのよ、美いちやん」

「好いわねえ、叔母樣だつて、まア何んでお可哀いんでせうね、私に抱かして置いて頂戴よ」

「そんな甘い事ばかり仰有るから、美代は眞個に此頃は不可ないんですよ、貴女がお歸りなさると後を追つて、夫れは夫れは厭になるほど長泣をするのよ」

「可愛いわ、私はね一生もう子供など持つ事は無いんだから、どうぞ美いちやんにでも、私を忘れないで頂くのよ、成人におなり遊ばしても今のやうに、私を慕つて下すつたら、萬歳に嬉しいだらうと、始終思つてるの」伊佐子は早や涙聲になつて、嗞へられないものゝやうに頬づれをする。

「また始つたわ、そんな心細い事を仰有つて、もう那麼事なら伺ひませんよ、それより、貴女」が言ひかけて振り向きざま。

「乳母や、美代を彼處へ連れてつてお呉れな」

向き直つて、眞面に改つて。

「あの串田さんがね、召集されましてね、今日出立ちますの、でね、とても送つて頂く譯には行きませんけれども、せめては一寸なりとお目にかゝつて立ち度いと申して居るので

すからね、それでね伊佐子さん」

「まア串田さんが？」と沈んだ聲。

「ホ、、、少些は可哀想だと思召して、ホ、、、まア夫れは冗談だけれども、もう是れぎりお目にかゝれないかも知れませんからね、可哀想ですの、何卒ぞ貴女逢つて上げて下さいな」

「はア、夫れはもう、私が願つても、お目に懸り度う御座いますわ、夫して私貴女と御一所にお見立も致しますわ」意外の言葉に暫時今子はあきれて居たが。

「ね、それぢやアまア、見送りまでもして下さいますの、夫れを聞きましたら甚麼に喜ぶんでせう、あゝ嬉しい、眞個に氣の毒なの、見送たつて宅から參る位ひのものよ、是れで私もほんとに嬉しいわ」とばかり我が事のやうに莞爾としたが伊佐子は思はずもほろつとした。

其間に外浪子爵家からは「一度ならず、二度までも迎へを寄こしたが、伊佐子は遂に行かなかつた、時間が迫つて、華枝が車で飛して來たそれにさへ、たゞ宜しくとばかり、悄然として歸り行く華枝の後姿を見送つてはら〳〵と落涙した、にぎやかな外浪子爵家の一行には伊佐子の美しい姿は交つて居なかつたが、出征軍人の凱旋の淋しい〳〵見送人の中に伊佐子は心から祝して見送つたので有つた。（完）

少女の手紙

佐野天聲

東郷大將の名が地球上を縦横に飛廻りたる六月初旬、自分は下の様な手紙を故郷の一小従妹から貰つた。もとより筆つきは幼いけれど、文句には處々穿ちがあつて、何處か偉う時弊を諷した様な點もあるから、原文のまゝを――讀みにくい假名だけを本字になほして――お目にかけると云ふ血氣盛りの癖の、戰にも行けず、とした。二十幾つといふ心臓が悪いの、頭が痛いのといつてる補充兵にもなれず、心臓の如き者の文章よりは此方がずつと鬱雲雀宜しくといふ僕の慰問の主意に叶はうと思ふから少し長いので場所塞げの嫌ひはあるが、まあ其様な事は大目に見て、一讀の榮を賜らば幸甚也矣。

（七月十一日大阪に於て）

兄さんは今何をしておいでゝすか、心臓がお悪いツて本統にお困りでせうね、奈良へ行つて、鹿とお遊びなすつたら、ちツとはよくおなりなさるかも知れないけれど、其れにしても、あんまり高い處へ登つたり、遠い道をあるいたりしてはいけないでせう、何卒早く癒くなつて、而して又此暑中休暇にはお遊びに來て下さいまし、お馴染のテス（犬の名なり）は此間、お父さんと一緒に、鐵砲打に行つて、大きな野猿坊を一匹捕つて來ました。私いねゝ〳〵してやつたら、大きな長い舌で私の頬邊をべろりと甜めたの、私びツくらしたわ、不意だツたから、ホゝゝをかしなテスよ、時々こんな惡

戯をするんですもの、而して此頃はね、日本海の大捷利で村中がお祭見たいに騒いでるもんだからテスも同じ様に浮かれちゃツて私が幾ら細引で縛つて置いても直ぐ解いては遊びに行くのよ、なか〳〵意地悪になりました。今度兄さんがおいでなすつたら叱つて貰はうと思つてます。今日學校で海戰の勝つたお祝びがあつて、大きな梅の花の打物のお菓子を貰つて來たけれど、兄さんに上げることが出來ないのでつまらないわね。其お菓子の表には、東郷大將のお寫眞が描いてあるのよ。本統に東郷大將は傑い人ねゝ、私はもう久しい前から大將のお寫眞の前へチャドウを上げてお辭儀する様にしてます。何しろロシヤの三十艘もある軍艦を滅茶々々にお潰しなすつたのだからお傑いに極つてますわ。あの方が若し萬一

とお負けなさりでもしやうもんなら、其れこそ支那においで大山さんや兒玉さんなどは日本へお歸りなさることが出來なくなつて、しまいには何うなるか知れなかつたのだツて此頃學校の先生に聞きましたが、本統に左様でせうか、本統でせうねゝ、學校の先生は嘘おつしやる方でないから矢張し本統に極つてるわね。左様して見ると尚更傑い人だと私思ふわ、イギリスのネルソツて人は丁度あの方の様な事なすつたんだツていいますけれど、私其様六ケしいこと知らないから何でもかでも、世界一の傑い人は東郷大將だと思つて居やう。兵隊さんも骨が折れるには違ひないけれど、又大將になつた方の心配ツてツたら兵隊さんに何十倍なるか知れないのだもの其

れを思ふと大抵の辛い事は辛抱しなくッちやなりませんのね。私つく〳〵あの戰の前の晩の東郷大將のお心持は何樣だつたらうかと思ふのですよ。ロジエストッて人の方が勝つた日には其れこそ大變なことだもの、幾ら傑い人だッて心配しないことはないだらうし、心配したとすれば、まあ何樣に心配なすつたらうと考へそと何だか氣が遠くなつちやッて涙がぼろ〳〵溢れさうになつて來るのよ。ねえ、兄さん、本統に左樣だらうぢやありませんか、何故新聞や雜誌では恁ういふことを書かないでせう。血だらけになつて鐵砲を握つてた人のことや、水雷艇に乘つて金の樣に浪の上を飛んであるいた兵隊さんのことなどは委しく書きながら、恁ういふ大切な面白いことをちッとも書いて呉れないのは餘ッ程何うかしてる

に違ひないわね。而して何だか人の名譽を嫉妬む樣な風があるのね。お國自慢をしないで、お國くさしをする人が多い樣だわ。是は私が云ふんぢやないの、姉さんのお話の受賣よ。姉さんで思出したが、姉さんがあなたに宜しくッて云つてました。是非此夏はお遊びにいらッしやいッて、おいでるでせう、屹度よ、待つてますからね、私も姉さんも。おいでる時は前の日に知らして下さい停車場まで迎ひに行くから、ラスも拉れて行くわ。此間は綺麗な繪葉書を有がたう、あれをね、裏の次郎のお袋に見せたら、大變喜んでね、二三日貸して呉れつて云ふから貸してやつたわ。次郎はねえ、奉天で怪我したけれど、もうすつかり全快したつていひますわ。あすこの家でもお神さんが赤ん坊を生んで、四五日前お强飯を炊

いで方々へ配りましたよ。私もお皿へ二ツ頂戴してたべたのよ。おいしかつたわ。兄さんがおいでるとよかつたわね。おなたお強飯が好きでせう。お嫌い、姉さんは好きですつて、お母さんも好きですよ。お父さんはお酒好だから駄目。また色々書くことがあるけれど、是からおさらひをしなくツちやならないから此位にしてやめます。奈良へおいでたら、あの私の名の刻りてある筥を一枚買つて頂戴。左樣なら、御病氣を大切になさいまし。めでたくかしく

只今諸々に居ります伊處、あのお聲、
あの大きな身體で、お國の歌を歌つたり
ヴァヰオリン」を彈いたりしますつて、
可愛らしいじやありませんか。

蝴蝶のゆめ

松井とも子

梅雨をくらき窓のうちに、くちなし色の蝶一つ舞ひ入りぬ。

人々のあたり近くさまよふを、花子は美しき小蝶の入りたるとて、ふすまなど閉ち、晝にやかましき歌にやよまいしなどと云ふを、姉のでる子は稀に入りたる小蝶は、自由にせさせてと云ふに、花子もうなづきつゝ窓おし開けば、思ふまゝにとびさり、いつとなく其かげ見えずなりにき。

降りしきる五月雨もいつしかはれ渡り、八重雲破りて初夏のよひ月めづらしう南の窓にさし入りし頃、出征第二師團第三

旅圃にいます友の元より、さつきの廿五日に認め給ひし御文
といきぬ。讀み返す御名幾度か封おし開きてよみ行くに。
本日は美はしき繪はがき給はり、都の空の忍ばれて嬉しう
候。繪はがきの櫻草を見つめ候て種々の空想をゑがき申候。
孃ちやん方の御姿がありく〳〵と見ゆて、小生も小蝶となり
て花中を飛び廻り度候へども、元來慾の多い男のことゝて、
蝶にも成りきれず、せめてこよひ夢になりと、御目のあた
りを小蝶に身を化し、おどろかし申さむ。されど風の變り
し蝶などと、御つかまへなされ、標本などになさらぬ樣御願
ひ申候。羽根などもがれては一大事とならぬ先より心配い
たし居候。……目下清河のほとりに居り候て、風景案外に
よろしく……春もみじかき夜の夢と過ぎ去り申候て、新綠滿

目、不如歸聞く頃と相成り、河畔の夕ぐれの散歩は唯一つ
の樂みに候。……月の出づる頃には、蛙の聲も聞ゆて、雪
舟の墨繪の中にある心地いたし候。蛙でさへ夜な〳〵天地
の愛を歌ひ候に、堂々たる男子の歌ひ得ざるはゝづかしく
候へ共、我も男子なり其內天地をうごかす歌唸り出して
どろかさむと意氣ごみ居候。至る所天父の御懷とは申せ、
やはり理想の友なつかしく相成候……。

給ひつる君が繪はがき胸にあて、
一人忍ばむむさし野の春

よみもてゆくまゝに、いとあやし、窓に入りしかのこてふは、
君にかはりて、我らが窓音づれしにはあらじか、いとあやし
といへば、よくぞとらへざりし、姉君、よくも窓ひらきて放

ちやりしかなど、花子もいふ。

月かげさし入れる文机に、一ひらの葉書とりいだして、君へ

かへしまつる歌。

満洲の草にも露はあるものを

など故郷の花にまひ來る

水清き滑河のきしに君立たば

神に祈のいやまさるらむ

なほ文認めてこてふの事ともいひ送りき。かなたにてもいか

にをかしと思ひたまふらん。

四人の姉妹

福岡君子さと

（一）

お忠さん貴女毎日何なさる

妾野に出て田を打ちて

そして鎌とり刈り納れて

屍の山血の川も

何のかはとて皇戰を

つゞき励め勵める同胞や

内族外戚のかたへ

糧を貢いで扶げん爲め

（二）

お君さん貴女毎日何なさる
妾糸繰り機織りて
そして針とり裁ち縫ひて
氷の原も雪の野も
物の屑かと皇軍へ
向かふ愛しの大丈夫や
後へ遺せるひと〳〵に
盡すは同じ國の爲め

（三）

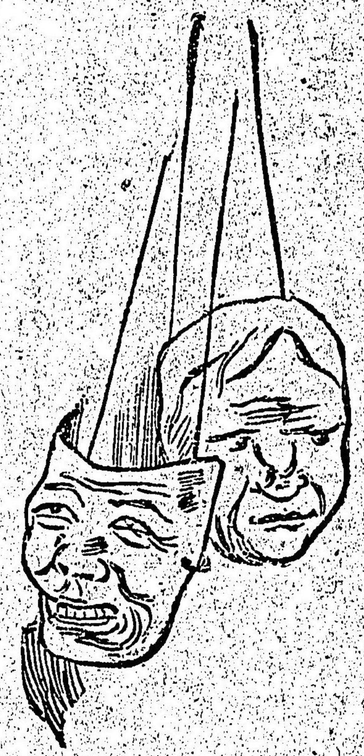
お愛さん貴女毎日何處へ行て
妾看護婦學校へ
そして貴女は何なさる
赤十字院へ志願して
今に征地へ飛び渡り
あまたの負傷へる勇士を
心のたけに看護して
傷を癒して報ひん爲め

（四）

お國さん貴女毎日何處へ行て
妾割烹のお稽古へ
そして貴女は何なさる
今に平和になりまして
あまたの武夫凱旋の

その時待つて八千種の
美味い御馳走差し上げて
肥へて太つて貰らふ爲め

草刈の日々刈進む夏野哉　癖三酔（三田俳句會）
アスナロの木深くなりし皐月哉　酔仏（俳星）
泥引いて犬の尾腐る五月雨　昔人（日本新聞）
梅雨晴るゝ遠つ濱名の入江哉　夢拙（同）
笠の緒の清十郎姿夥の秋　桃家（同）
大なぎに蝸蝸飛ぶや島の月　乙字（同）
千爾の色たぐひ立つ雲の峰　碧童（同）
靜かにも梅干す家や梅林　癖三酔（東京五句集）



戰死者の永生

死は我肉體の斷滅也、然れども我が精神の存在は我が肉體の斷滅と相伴ふべき者に非らず、肉體未だ死せずして其精神早く已に死せるものあり、肉體已に斷滅して、其精神は長へに

存在するものあり、彼は即ち生ながら地獄の火に投せらるゝ者にして、此は即ち天國に永生を享くるの人也、肉體の生命は短し、七十は古來稀也と稱す、此を彼の天體の發射する光線が我地球に達するの時間、實に數十年を要するものありといふに比較し來れば、宇宙の大と、人生の小と兩々相照映じて吾生や眞に須臾たるの感を禁ずる能はず、吾人の精神若し肉體に繫縛さるゝものあらば、人生は實に悲慘なりといふべし、彼の生ながら地獄の火に投せらるゝ者は、即悲慘なる人生の說明者也、吾人の精神克く肉體以上に超越し、生死岸頭に立つて大自在なるを得るものあらば其人や即ち天國に生を享くるに足るもの、基督の所謂『世に勝てるの人』は正に斯の如くならざる可らず。

生ながら地獄に投せらるゝの資格ある者は、我、之を高利貸に於て、若くは御用商人に於て、甚しきは社會の風敎を監督すと自稱する當局の大臣輩、貴族の上班に列して勳位榮爵を飾れる某々の徒に於て痛ましき其實例を見たり、彼等の肉體は豚の如く膏切れるものあるべし、されど其精神は即空洞・なり、光無く、生命無く、神ある事無し、假令人間の手に製せらるゝ歷史の上に、空名を留むるの僥倖を贏ち得るに至らんとも、彼等の姓名は天國の記錄には省かるべきもの也、天國の記錄に永生の名を錄して、長へに神と共に其精神的存在を繼くを得べき資格ある者は、今回の戰役に於ける戰死者諸君の如き、正に其然るべき所以を見る。

戰爭は忌むべく怖るべし、吾人は一日も早く地上に戰爭の

絶滅する時期を到來せしめん事を翹望す然れども徒らに皮相
の文明に走り、利慾にのみ渇して、敢て人道と博愛と眞髓如何
を顧みず、侵略的暴手を伸ぶるに忙しき者の絶えざる間は、
止むを得ざる正當防禦の手段として、戰爭も亦必要也、否、
不義の敵を挫きて、我が正義を立するの戰爭は、やがて戰爭
の跡を地上に絶たんとする理想境に、近く一歩を進むる所以
也、日露戰爭は我が大日本帝國正義の主張が、露國の不義な
る慾望と衝突せるものなるに過ぎず、天祐我に在り、連戰連
勝宜なる哉、而して所謂天祐とは、喜んで正義の爲めに其生
命を獻げ、國家の爲めに笑つて其肉體を犧牲とせる戰死者諸
君の衷心に閃ける神の面影を指すものに外ならず、否其刹那
に於て、直ちに神と同化し得たる諸君の精神の崇美、仰いで

以て讃歎するに堪へたらずや、諸君の如きは實に天國に永生
を享くるの人たる也。
之を露國の戰死者に見よ、國家に對する義務の爲めに、其
肉體を獻じたるの點に於ては、素より讃歎に價すべし、然れ
ども彼等が義務を盡すべき國家其者の目的は、他人の國を奪
ひ、自己の私腹を肥さんとする不義横道の行を遂げんとする
ものなる也、國家の目的と、臣民の義務との間に、斯の如き矛
盾衝突あり、若し之を自覺せば、甘んじて死に就くを得んや、
正義許さいるが故に死を拒まば、義務の利刀は直ちに其背を
刺さんとす、義務ならざる義務の爲に戰死せる露國の將士は
實に憐むべきにあらずや況んや其一死は以て國家に何等の利
を齎らす處なく、連戰連敗の果を招くに過ざるに於てを

や、吾人は殆んど何の辭を加ふべきかを知らざる也。

敵國の戰死者が、斯の如き矛盾と悲運との下に其生命を奪はるゝに比し來れば、我國の戰死者が戰爭の目的と、臣民の義務と善く相一致して、人類平和の理想の爲めに其肉體の死を甘んじ、而も着々勝利の榮冠を加へて、笑つて瞑するを得るは、寧ろ多幸多福、武人としての面目、此に過ぐる者無く、國民としての榮譽共に比すべき者なきにあらずや、『凡そ人、其友の爲めに生命を捐つる此より大なる愛はなし』と、我國の戰死者は一面、世界人類の爲めに、又他面日本國民の爲めに、生命を賭して大なる愛の働きをなせるもの也、彼等は實に人類の恩人として、長へに感謝せらるべく、所謂精神的の永久なる存在なる也、五十年の肉體的存在を抛つて、天國の永生に入る、吾人は肉體的死を決して廉價なりと云はず、されど精神的永生は更らに價貴き獲物なる事を認知せざるを得ざる也、彼の、高利貸と、御用商人と、某々大臣の徒と某々榮爵の輩は、夢にだも斯の如き神の恩寵に干るを得ず、戰死者は一兵卒と雖も讃美すべき哉、彼等は今、神の懷に在り。

然り、戰死者諸君は、少くとも其死の剎那に於て神を握手し、神と同化して天國の永生に入りたる也、正に遺憾なかるべし、されど遺族諸君も亦各戰死者の意を諒し、其崇高偉大なる精神と同化せざる可らず、戰死者の犧牲的精神が、遺族諸君の心中に活くるはやがて戰死者の精神的存在を確實に保證する所以也、彼等の親たる者、妻子たる者、深く意を此間に致して、考慮する處あらば、決して戰死者の名譽を辱むる

が如き所行を爲し得ざるべきのみならず、又實に彼等をして死後の面目を加へしめ、肉體の斷滅が更らに精神の活力を自由自在にし、却て何等の束縛無くして愈其妙作用を逞うする所以を明にし得べきもの也。

當に遺族諸君のみに止まらず、戰死者を出せる鄉黨は宜しく其犧牲的精神に皷吹せられ、自治の根本を固うし、諸般の施設に正義と博愛との光燄あらしめよ、此れ大なる紀念碑よりも更らに尊き活ける紀念碑なる也、豈當に一鄉黨のみならんや、之を推して一地方に及ぼし、進んでは廣く我が國民全體の上に、戰死者の犧牲的精神を復活せしめ、其大なる愛の働きに感奮、興起して各自其品性を磨き、人格を向上し、博愛と人道との爲には、敢て肉體の死を甘んずるの愛他的氣風を養成して、世界人類救濟の大使命を自覺するに至らば、幾萬の戰死者、莞爾として天上に微笑するならん乎。

若し心眼、天地の神に面接する能はざる者あらん乎、即肉眼、戰死者の俤に見よ、其遺骨に迎接せよ、神は其處に儼存す、嗚呼戰死者諸者は神の子也、少くとも神の子の面影を諸君の衷情に於て認め得べき也、吾人も諸君と共に天國の永生に入るの大歡喜を頒たざるべけんや。（兜生）

出征軍人諸氏に呈す

謹んで忠勇なる我が出征軍人諸氏に白す。

日露交戰以來茲に一年有半、勇戰奮鬪常に勝たざるなき卿等

の忠勇と武勳とは、内外人士の驚嘆措く能はざる所、今更に贅々するの要なきなり。我等内地に在て平安なる者、雨につけ、風につけ、將た月花に對しても、萬里遠征の卿等を懐ひ、同情の念、感謝の情轉た堪へざるものあり、たとへ千萬言を以てするも、我等の情念を尽すに足らざるを覺ゆ、卿等の我邦民心の奥底に印刻せる感化の如何に多大なるものあるかを知るべきなり。今我等は何を以て慰問の辭となすべきかを知らず、只一片の微衷を獻せんと欲す、希くは一讀の榮ぞたまへかし。

わが知れる一家に三人の兄弟共に出征したるものあり、其二人は將校にして、一人は准士官なり、家に在る双親頭既に霜を戴き、六十路の坂を踰ゆ。海陸大小の戰闘ある毎に、同郷

兵士戰死の報は傳へられ、幾度か双親の心臓を刺撃し、鼓動を高からしむ、父上つらく〳〵以爲(おもら)我子三人共に無事凱旋するを見ば如何に、其満足や喩へんに物なきも、同郷戰死者の遺族に對しては何となく氣の毒の情あり、左ればとて一子倒れ、二子倒れ、三子亦倒れたるの報知に接せば如何に、我子の生還は、かねて期する處にあらざるも、愈其時に際會せば或は狼狽喪心の窮境に陷るやも知り難し、一夜萬籟靜かなるの時此事を思ひ續けて已ます、嗚呼如何にして此時に處せんかと千思萬考の末、須らく安心立命の信を得るにあり、宗教上の光明是即ち我が救ならめと、直に其心情を吐露して、基督教師の教導を求め、爾來斯教を修めて怠らず、偶一子戰死の報に接しても、舉措常を失せず、高貴なる捧物に對して

自から慰籍を覓へつゝあり。

如何に卿等が慘憺たる戰場の心的經驗と髣髴たるもののあらざるか、炮煙彈雨は素より卿等の怖るゝ處にあらざるべし、檣風沐雨また何の意とする處ぞ、左りながら人間一たび生死の巷に立つ、誰か宗教の問題なからん、身を大元帥陛下に捧げて國難に殉ずるは、素より平生の覺悟なること言ふまでもなけれど、我が生命を皇天に托して更に動せざるの宗教的安心なくして已むべけんや。聞く寂たる陣營の夜は、松吹く風の音も、きらめく星の光りも、己が運命を思はしむるの種子とかや、ア、我れ何が爲めに劍を執て戰ふか、何故に人の子の血を流すべきか、戰爭は人生の一大悲劇なり、我れ何故に之を敢てするか……己が流血若し敵國の暴戾を救ひ、世界の人道を進むるの一滴となるを得ば、我奮つて戰ふべし、皇天願くは我が心事を照覽ましませ。

の祈禱にあざるか、已が愛子の身上を念ふて、苦心慘憺たると、劍を提げて戰場に立てる卿等の心的經驗と相類似せるものある豈に偶然ならんや、危きを踐んで外にある卿等と家を守りて內に在る親心と、千里相契合して共に天命を信じ立命の安慰を發見しつゝあるを知る、卿等に對する深高なる同情は人間の及ぶ能はざる皇天の仁懷にあり、慰勵にあり、祐助にあり、願くば思を聖境に逍遙せしめよ。

又わが知れる一人は愛妻を迎へ、伉儷相和し淸樂堂に滿ちて新婚の甘き夢路に遊ぶ僅かに一ケ月、一朝召集に應じて行く や新夫は勇を戰場に揮ひ、新婦は謹愼家を守れり、日月漸く

經過し新婦家を守るの苦心は、新夫が奮闘の苦に讓らざるものあり、しかも土俗の惡風は小心孤閨の新婦をして途由なき醜名をさへ荷はしめんとす、憤慨、悲痛、斷腸、之を縷述して我良人に訴へんか其時にあらざるを如何、わが實家に走りて泣かんか舅姑の疑惑を如何未だうらわかき新婦の胸中悶々遣る方なく、天の下地の上たい孤獨を覺ゆたる彼女はわれ知らず天來の安心慰樂を切求して今や靈光と平和とを基督の福音に認め、勇氣頓に加はり、勇姑に哀求して身は看護婦となり誠忠を傾盡して新夫の凱旋を俟ちつゝあり。此の如く卿等が戰場に在て誠忠を挺で身を邦家に獻じて戰ふの時、家には人道の戰爭あり煩悶あり、悲痛あり、しかも彼等家族をして人生の秘義を悟らしめ潔き決心を以て誘惑と戰ひ、不義と戰ひ光輝ある眞心を卿等に捧げつゝあり、是れ卿等が內に在る我等同胞に與へたる偉大なる感化にして又卿等の慰藉にあらずや光明にあらずや、戰爭は人生の一大事、茲に始めて人たるの眞面目を發揮す、宗教的悟得と慰樂とは實に天來の光明たるなり。

五十年來の嗜好物たる酒と煙草とを廢して卿等の苦心を偲ぶ老翁あり、冬天足袋を穿たず衣服を薄うして卿等の苦痛を懷ぶ青年あり、卿等が血戰の高價を空しうせざらんが爲めに、作戰計畫準備おさ〳〵怠らざる實業家もあり、教育家亦漸く覺醒して眞面目に赴かんとし、幾萬の青年又切りに心胸を開拓して人道の戰士たらんと期しつゝあり、もし夫れ婦人の活動に至ては前古未聞の事なるべし、元祿の餘弊を今日に再現

せんとし奢侈浮誇に流れんとする傾向なしと云ふべからざるも、しかも日露の戰ひは我國民の覺醒なり興奮なり、作新なり、發展なり、いづくんぞ此大勢を沮礙するものあらんや。今や我が上下の人心は眞面目の洗禮を領しつゝあり、日本國民たると同時に世界の人たらんとし、世界の人たると同時に一人の子たらんとし、物質上の勝利者たるべきと同時に精神上の勝利者たらんとするもの日に益多きを加へんとす、卿等の奮戰は國民の奮戰なり、卿等の生死問題は是國民の死生問題なり、卿等の獻身犧牲は又國民の獻身犧牲となりつゝあり、卿等の感化亦偉大なる哉。天佑豐かに卿等の上に在り、國民の上にあり、豈大なる光榮にあらざらんや、慰藉たらざらんや。

又敬愛する我が戰死者の死はたゞ徒らに滿洲の露として晨の光りに消ゆべからず、限りなく流れて國家の生命となり、人道發展の泉源となり、文明進歩の動力たるべきなり。

炎官暴威を逞ふして熱砂天を焦すの時我等は卿等遠征の勞を想ふ轉た切なるものあり、茲に愚衷を披瀝して慰問の意を表す、幸に諒せよ。

（野口生）

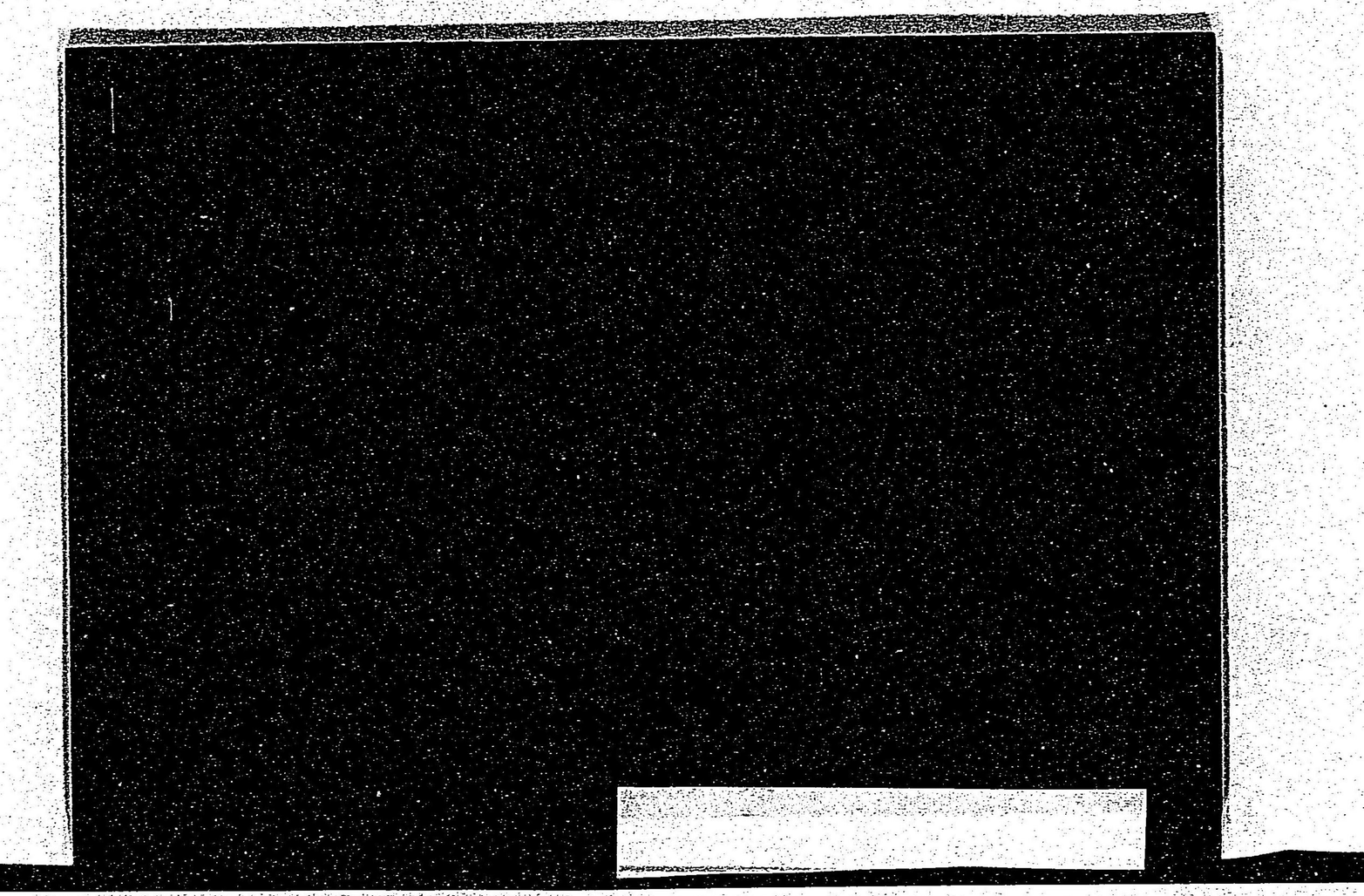
明治三十八年八月十四日印刷
明治三十八年八月十八日發行

定價金七錢
郵稅金二錢

東京市麻布區龍土町七十二番地
編輯兼發行人 山本邦之助

東京市赤坂區田町五丁目十一番地
印刷人 齋藤豁

東京市神田區美土代町三丁目三番地
發行所 日本基督教青年會同盟



特61
474

020222-000-0

特61-474

慰安の福音（新人慰問号抜萃）

山本 邦之助／編

図版

M38

ABI-0024